
ボクはアイルー

野雲 数夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ボクはアイルー

【Nコード】

N5827T

【作者名】

野雲 数夜

【あらすじ】

テンプレで死んで転生。

ただし、転生先はアイルーだった……みたいな。

諸事情により、暫く休載します。

ぶろろーぐ（前書き）

たぶん初めまして。

よろしく願います。

ぶろろーぐ

平成二十三年某日、僕は死んだ。

死因は高所からの落下。その際頭部を地面に強く打ち付け即死。学校の屋上、落下防止のフェンスを越えた場所からの落下であり、フェンスが破損した様子がないことから事故死ではなく自殺と断定された。

「……………」

簡単に、一枚の紙にまとめられた僕の人生の結末。それを読み終えたとき、僕は無言で首をかしげていた。

内容が間違っているとかそういう訳ではない。

僕の死因は間違いなく高所…つまりは学校の屋上からの落下であり、自殺である。実際にフェンスをよじ登り、屋上から飛び降りた記憶があるのだからそれは疑いようがない。

僕が疑問に思っているのは別のことである。

「で、それが君が死んだ状況なんだけど……ぶっちゃけ何で自殺なんてしたのかね？」

「いや……うーん、何ででしょうね？」

質問を質問で返し、僕は声の主を見る。

モサモサの白いヒゲを生やした爺さんで、トーガとかいう古代ローマの人が着ていたガウンのような物を身に付けている。

なんでも格の高い神様なのだそうだ。本当か嘘かは分からないが、

一見ヨボヨボの爺さんだがなんだか妙に存在感を感じる。

僕個人の感想を言うと、神様かどうかは分からないが間違いなくただの爺さんではないと言ったところだ。まあ、頭のおかしい爺さんが自称神（笑）を名乗っているだけということも否定は出来ないが、その可能性は低いだろう。

「僕自身、なんで自殺したのかよく分からないんですよ……」

それがさつきから首をひねっている原因だ。

はつきり言っ僕には自殺する理由なんてないのである。確かに僕は日々の生活に満足していたとは言い難い、だがそれなりに充実はしていたのだ。

「ふーむ、ならばやはりこちらの過失かのお」

爺さんは髭をひとなですると、懷から一枚の紙を取り出した。

「何ですか、それ？」

「この紙には君の今後の人生が書かれていたのじゃよ。君はそこそこ満足して死ぬはずじゃった……」

「……じゃった？」

爺さんの言い方が妙だったので思わず言い返す。

「そそっかしい部下がおつての、誤って消してしまったのじゃよ……君の今後の人生をな」

「つまり、僕が自殺したのは今後の人生がなくなったから……と？」

「うーむ、実はそれが良く判らなくての」

髭を撫でる爺さん、癖なのだろうか？

「確かに君はあのあと死ぬ予定だったのじゃが、自殺ではなくトラックにひかれて事故死するはずだったのじゃ」

「……それがなぜかその前に自殺してしまった？」

何かややこしいことになっているようである。

「うむ、その通りじゃ。それでの、君をどうするかこのままでは決められないので、わしが直接判断しにきたというわけじゃ」

天国地獄、果たして僕はどこ行きなのだろうか？

「……で、とりあえず僕はどうなるんですか？」

「そうじゃな、まあおそらくはこちらのミスが原因なのじゃろうから……転生かのお」

「転生？」

「こちらのミスで死なせてしまった者は、君の他にもおつての。そういう者たちにはせめてもの償いとして望みを一つ聞き入れ、異世界に転生させることにしているのじゃよ」

「と言うことは、僕にもその望みを言う権利があるんですね？」

「うむ」

うなずく爺さん。

「望みとは何でも良いんですか？」

「まあ、叶える望みを増やすとかそういうのは却下だかの。最強になりたいだとか、ハーレムを作りたいとか、大抵のことなら叶えてやるから遠慮せずに言うが良い」

「そうだな……じゃあ、僕の家族の爺さん婆さんが死ぬまで幸せに暮らしていけることを望む」

「む、そんなことで良いのか？ 欲がないのお」

「爺さん婆さんは僕の大切な家族です。思い上がりかもしれないけど、きつと爺さん婆さんにとっても僕は大切な家族だと思う」

「……………」

「大切な家族が死んだら悲しいです、死んだ理由が自殺だって知ったら、きつと二人は自分たちを責めてしまうと思うんです……僕はそんなの嫌なんです」

きつと僕の望みはとても自分勝手な願いだろう。

「ふむ、良かろう……望みは聞き入れた。老夫婦はわしが責任をもつて幸せに暮らせるよう取り計らおう」

「ありがとうございます」

きつとこの爺さんなら約束を守ってくれるだろう。

「転生先の世界は、君の知る漫画やゲームのイフの世界からランダムに選ばれる。これにはいろいろな理由があるが、君たちのようなイレギュラーを受け入れやすいというのが大まかな理由じゃ」

漫画やゲームと言われてもなあ……出来れば平穏に暮らせる世界が良いかな。

「僕は何の世界に転生するんですか？」

「それは行ってからの楽しみじゃ、ぶっちゃけわしにもわからん……じゃあ、送るで」

「はい……」

返事をしてすぐ、テレビの電源を切るように僕の意識は途切れたのだった。

ぶろろーぐ（後書き）

タイトルとかでどこ行くかまるわかりというorz

一話・アイルーの就職活動

「くああーあ……」

大口を開けてアクビをし、ゴロリと地面に寝転がる。

やはりあの爺さんはただ者ではなかったようで、僕は生前の記憶を引き継いだまま新しい命として生を受けた。

何が原因かはよく分からなかったが、受けた恩も返せずに死んでしまった僕にもう一度チャンスを与えたのだ。

そのこと事態は感謝している。

ただ、一つだけあの爺さんに言いたいことがある。

僕は寝転がる自分の身体を見回した。

成人男性の膝と同じくらいの身長、身体中に生えたフサフサの体毛、そして何より手足にあるこの肉キユウである。

僕はモンスターハンターの世界に、アイルーとして転生したのである。

確かにあの爺さんは、絶対人間に転生するなんて一言も言っていなかった。

だが、人外（アイルーが人外かどうかは微妙だが）に転生する可能性があるのなら、あらかじめ教えて欲しかった。

下手をしたら、とんでもないものに転生していた可能性があると考えてゾッとする。

アイルーと言えばモンスターハンターのマスコットキャラクター

であるから、まあ運は良かった方だろう。

「ほおれ、そんなふうに寝てるから、いつまでもハンターちゃんに雇ってもらえないんよお」

「そんなにやと言われてもにやあ、ボクだって最初は立派なおトモになるって張り切っていたけどにやあ……五つの町村を回って、ヒツトが一つも無しじゃさすがにだれるにや」

同期のアイルー達は全員すでにハンターに雇われ、残っているのは僕一匹だけである。

「お前さんを雇ってくれるハンターちゃんはきつと見つかるから、シヤキツとしなさいなあ」

「……そうかにやあ、まあネコバアがそう言うにやらもうちょっと頑張ってみるにや」

今僕が話をしているのはネコバアと言い、大きな力ゴを背負った青い服の婆さんである。アイルーをオトモアイルーやキッチンアイルーとしてハンターに紹介する仲介業者だ。

我らアイルーにとっては職業斡旋所のような人である。

僕は体を起こすと、ネコバアの横に立つ。

駄目で元々、とりあえずハンターを見掛けたら積極的にアピールしてみることにした。

「旦那、着きましたにゃ。ここがユクモ村、温泉で有名なとっても良い所だにゃ」

「ん、送ってくれてありがとう。とりあえず村長さんに挨拶したいのだけど、どこに居るか分かるかな？」

長旅でこった身体ほぐすように伸びをして、荷車から降りる。

「村長なら、いつも階段を上がっていった所の長椅子に座っているにゃ」

「うん、わかった行ってみる」

「じゃあ、ボクはもう一つ向こうの村に用事があるから行くにゃ」

「本当にありがとねー」

私は、ここまで送ってくれたアイルーが見えなくなるまで手を振り続けた。

私の名前はユキ・シロガネ、ハンターギルドに登録したばかりの新人ハンターだ。

ギルドの紹介を受けて、ここユクモ村にやって来たのである。

階段を上った所で、長椅子に座る竜人族の女性を見つけた。たぶん、この人がユクモ村の村長さんだろう。

「あの、ここの村長さんですね？ 私、ハンターギルドから紹介

されて来ましたユキ・シロガネです」

「あらまあ、ようこそおいで下さいましたハンター様、わたくしがこのユクモ村の村長でございます。以後、よろしく」

「あ、はい、こちらこそ宜しくお願いします」

私はそう言うとペコリとおじぎをした。

「ギルドからお話を聞いておられると思うけど、貴方には、この村のハンターになっていただきたいの。」

その為にこの村にやって来たのだ。私は村長さんの言葉に力強く頷いた。

「以前は、村に訪れるハンターさんで、何とかなっていたんですけど、最近は少々物騒でして…その話はまたいずれ」

村長さんから小袋を手渡される。

「こちらが契約にあった支度金です。道具を買うのや、オトモさんを雇うのに使って下さい」

「有り難うございます」

受け取った小袋はズシリと重たい、大切お金だから慎重に使おう。

「お話は以上です。では、そうですね、村の中を一通り見て回られてはいかがですか？ 村の子達も貴方に興味があるようですから。落ち着いたら、また話しかけてください。軽めなクエストをご紹介します」

させていただきますわ」

「はい、それじゃあそうしてみます」

さて、まずはどこから見て回ろうか。

「うーん、とりあえず適当に回ってみようかな」

そうして、村を見て回ろうとしたときである。

「だんにやさん、だんにやさん。ボクを雇わないかにや?」

私は、妙ににやーにやー言う、ちよつと変なアイルーと出会ったのだった。

「にやあ、ネコバア……」

とりあえず頑張ってみようと意気込んだのは良いのだが……。

「この村はあまりハンターがいないのかにや? 何か、さつきから全然ハンターっぽい人が通らないのにやけど」

首をかしげる僕。

「そんなことはないはずなんだけどねえ?」

ネコバアも首をかしげている。普段はちゃんとハンターがいるよ

うだ。

何なのだろうか、僕は就職出来ない運命だともいうのだろうか。

「まあでも、村長ちゃんが言っただけで、この村のハンターちゃんになる子がくるらしいから、きっと大丈夫だよお」

「むう……もしかして、あれかにゃ？」

ネコバアに言われて村中を見回すと、村長の方に向かって歩くハンターっぽい格好の人を見つけた。

「村長ちゃんが、やって来るハンターちゃんは新人の女の子だって言っていたから、たぶんそうだろうねえ」

「新人かにゃ、確かにヒョロツとして、弱そうだにゃ」

「こおれ、お前さんだってひよっこじゃないかい」

ぽんつとネコバアに頭を叩かれ叱咤される。

「にゃはは、そう言えばそうだったにゃ」

新米同士、共に成長していく。

ある程度経験を積んだハンターに雇ってもらおうか思っていたけど、そういうのも良いかもしれない。

「ネコバア、ボクちよつと売り込みに行ってくるにゃ」

新人ハンターならまだオトモアイルーを雇ってないだろう、僕を

雇ってくれる可能性は高い。

「どうしたんだい、何か急にやる気を出したねえ。まあ、頑張っておいで」

「にゃあ！」

一言ネコバアに挨拶して、僕はハンターの方へ向かう。

ちょうど村長との話しは終わったらしく、キヨロキヨロと村中を見回している。今から、村の中をいろいろ見てまわるつもりなのかもしれない。

「だんにゃさん、だんにゃさん。ボクを雇わないかにゃ？」

クイクイとハンターの服を引っ張り声をかけた。

ハンターは初めて僕に気が付いたようで、少し驚いた様子だ。

ネコバアの言った通り女の子で、ユクモシリーズと呼ばれる防具を装備している。このユクモシリーズは、ユクモ周辺で取れる素材から作られる装備で、狩猟や林業での使用、旅装など幅広い用途で使用される装備である。

「今ならにゃんと、僕特製ドングリペンダントが付いてくるにゃ！」

自慢の一品だが、雇ってもらえるのなら惜しくはない。

僕は首にかかるドングリペンダントを取り外すと、ハンターに差し出したのだった。

「いや、えつと……」

声をかけてきたのは、濃いブルーの毛並みのアイルーだ。どうやら、オトモとして雇って欲しいらしい。

「今ならにゃんと、ボク特製ドングリペンダントが付いてくるにゃ！」

お得感を出してるつもりなのか、自分の首に懸けてあつた、大きなドングリにヒモを通したアクセサリーのような物を差し出した。

正直、あまり欲しくない。

「あー、これはいらなかな……」

やんわりと断る。

「そ、そうかにゃ……残念だにゃ。またダメだったのにゃ」

するとアイルーは、がつくりと肩をおとしてうなだれてしまった。

何かすごい罪悪感。

「ちょ、ちょっと、誰も雇わないなんて言っただけでしょ！？ 私
は、そのペンダントはいらないうって言っただけよ」

「や、雇ってくれるにゃにゃ！？」

キラキラとした目で私を見上げるアイルー。

「まあ、雇っても良いけど…オトモって、ネコバアに紹介してもら
うものなんじゃないの？」

「まあ、だいたいはそうだよ。アイルーのなかには、各地をさす
らって契約してくれるハンターを探す猛者いるらしいけど、効率が
悪いから、ほとんどのアイルーはネコバアに仲介を頼んでいるのに
や」

「ふーん、そういうものなんだ…。あなたもそうなの？」

「にゃあ、そうだよ。だからボクを雇うなら、ネコバアに仲介両
を払って欲しいにゃ」

仲介両っていくら位なのだろう？

「とりあえず、話しの続きはネコバアの所でしましょう」

何か必死だし、最初のオトモはこの子で良いかなとは思っている
けど、仲介両によつては、雇ってあげられない可能性もあるのだ。
うかつな事は言うべきではないだろう。

「わかったにゃ、ネコバアはあそこにいるのにゃ」

アイルーが手で指し示した方に、大きなカゴを背負った婆さんを見つけた。

「あの人ね、じゃあ行きましょう」

そう言つて、私はネコバアに向けて歩きだした。

アイルルがヒョコヒョコと、私の後を付いてくる。ちょっと可愛い。

「おゝ、待つとったよゝ。あんたが新しいハンターちゃんじゃなあ」
私が近づいていくと、ネコバアの方から話しかけてきた。

「あ、はい。ネコバアさんですよね？」

「そうだよゝ、この子から聞いていると思うけど、アイルル達の仕事場を探してあげているよ」

「あの、いきなりなんですけど、仲介両つておいくら位なんでしょうか。私、この子を雇いたいんですけど、なにぶん新米ハンターなので…」

いやまあ、いきなり金の話なんてどうかとは思っけどね…。

「おおゝ、ハンターちゃんこの子を雇ってくれるのかい？」

「だ、だんにゃさん、本当にや！？ 本当に雇ってくれるのかにや？」

「うん、そのつもり」

「うおおー！！ やったにゃあ！」

よほど嬉しいのか、飛び跳ねて喜ぶイルル。

「ありがとうねえ、この子はとっても良い子なんだけど、なかなか

雇ってくれるハンターちゃんが見付からなくてねえ……いつもなら仲介両1000zだけど、今回はあたしからのサービス、ただで良いよ。よくしてやってくれなあ」

「はい、ありがとうネコバアさん」

何か1000zも浮いた、ちゃんとこの子も雇ってあげられたし、ちよつと得した気分だ。

「ああ、そうだハンターちゃん。実はこの子には名前がないのじやよ、良ければつけてやってくれないかねえ？」

「え？ あなた名前がないの？」

アイルーに話しかける。　そういえば、このアイルーは一度も自己紹介をしていない。

「まあ、ちよつとした事情でにや。特に不自由はにやかっただしにや、良い名前を頼むにや」

「私、そういうセンスないよ？」

「だんにゃさんが付けてくれた名前にやら、ボクはどんな何でも受け入れるのにや」

そう言っつて、じつと私を見つめるアイルー。

「そうねー、それじゃあ……」

トントンと指で額を叩きながら考える。

「決めた、あなたは今日からグンジョーよ」

深い青色の毛並みだからグンジョー、我ながら単純である。

「グンジョー……。うん、簡単で分かりやすいにや。ありがとうだんにゃさん、このグンジョー、今日からオトモとして精一杯頑張るにや！」

こうして、私とグンジョーのハンター生活が幕を開けたのだった。

一話・アイルーの就職活動（後書き）

更新ペースは短めの文章を1〜2日に一度の予定。

書きためとかないので、文字数は千前後が自分の限界orz

二話・はじめてのクエスト（前書き）

第二話開始。

今回から残酷描写のタグを追加しました。

二話・はじめてのクエスト

「にゃんだかにゃ……」

僕がグンジョーになったその翌日、僕達はさっそくクエストに出かけていた。クエストの内容は、特産キノコ20本の納品。新米ハンターが狩場に慣れるための、いわずと知れた初心者クエストである。

僕はオトモアイルーとして、旦那さんはハンターとして、お互いに初のクエストである。

当然、やる気満々でクエストに望んだのだが……。

「てえい!!」

旦那さんの掛け声とともに振り下ろされた片手剣が、ジャギイと呼ばれる小型モンスターの首もとに直撃した。

傷口から大量の血を流し、くずれるように倒れるジャギイ。二、三度痙攣した後、完全に動かなくなった。

安全とは程遠い、常にモンスターに襲われる可能性のある世界で生きてきたのだ。生き物が死ぬということに触れる機会は多く、ある程度、僕は死という物に慣れていた。

「だんにゃさん、依頼内容は特産キノコの採取だにゃ。ジャギイばかり追いかけてたら、期限に間に合わないにゃ」

キャンプのテントを張り終え、少し休憩してから狩場に出た。

旦那さんは、それからずっとジャギイを狩っていたのだ、おかげで旦那さんのバックの中はジャギイの素材でいっぱいである。

「え、あ、ごめん…忘れてた。まあ、狩場の安全確保ってことで…ね」

テヘへと申し訳なさそうにする旦那さん。

「確かにそれは大事なことにゃ」

採取中など、すきだらけの所を襲われないように、ある程度のモンスターを狩っておくのは普通なことである。

「でしょ?」

「だがしかしだにゃ、依頼そっちのけで狩り続けるのを、ある程度とは言わないのにゃ!」

空を見れば、すでに夕暮れ。夜に慣れない狩場を出歩くような愚行を行う訳にもいかないので、今日はもうキャンプに戻るしかない。納品期限は四日、僕達はその一日目を潰してしまったのだ。

「大丈夫だって、まだ三日もあるんだし」

気軽そうに言う旦那さん。

「四日目はキャンプの片付けがあるし、その日中に納品だから、実質二日だにゃ」

今、僕達がいる狩場は溪流と言い、そこまで広い狩場ではない。だが、それでも一回りするのに結構な時間がかかるのだ。

特産キノコは溪流のほぼ全域に分布しているらしいが、一つの場

所で採れる量は限られるだろう。

僕の脳裏に、特産キノコ納品クエスト、通称キノコクエスト失敗というゲームではまずありえない状況がよぎるのだった。

「……ふう」

一つため息をつき、私はテント内に設置した簡易ベッドに腰かけた。

アイテムポーチを開き、手に入れた物を確認する。
ジャギイの皮や鱗、骨などが大量に押し込まれたポーチ。我ながらよく集めたものである。

「さて、整理整理つと……」

中身を全て取り出し、地面に並べる、明日の狩りに使う物と使わないものとを分けるのである。地面に並べた物の中から、応急薬や携帯食料などをポーチに詰めなおした。

「素材とか、空になった応急薬はどうしようか……。うーん、まあ支給品ボックスに入れておけばいいか」

支給品ボックスのフタを開け、空の容器や素材を詰め込む。ついでに使った分の応急薬と携帯食料をポーチに補充した。

「よし、あと武器の手入れをしてご飯を食べれば、今日はもう寝るだけね」

食事の用意はグンジョーがしてくれているので問題ない。まあ、食事とは言っても、保存が利く塩漬けされた骨付き肉を焼いただけの簡単なものだ。通称こんがり肉と呼ばれ、非常に塩気が強いがお腹にたまるので、クエスト中のハンターが好んでよく食べる。実際私はあの塩気が中々好きだったりする。

まあ、グンジョーが言うには、「塩気がどうのここの言っているのは、真のこんがり肉を食べたことがにやい二流だにや」なのだそうで。

「僕がだんにやさんに、真のこんがり肉と言う物を食べさせてやるにや！」

とか言って、背中のおから肉焼きセットを取り出していた。何でも、自作の肉焼きセットで、こだわりの一品らしい。

というわけで、グンジョーが真のこんがり肉なるものを作っている間に、私は荷物の整理と明日の準備をしているのだ。

私は片手剣《ユクモノ鉈》を手に取り、早速手入れを開始した。ユクモノ鉈は、鉈を狩猟用に改良した片手剣で、林業が盛んなユクモならではの装備らしい。ハンターギルドでハンターになったときに貰った物だ。

「……よし、こんなものかな」

研ぎ終えたユクモノ鉈を持ち上げて、刃こぼれが無いことを確認する。肝心な時に使えないなんて事にならないように、武器のチェックは入念にすることになっているのだ。

「うつるとら上手に焼つけましたー、にゃ！」

武器の手入れを終えて道具をしまったときだ、テントの外からグンジョーの弾むようなリズムの音が聞こえた。

「こんがり肉が焼けたのかしら？」

しかし、あの妙な掛け声は何なのだろう？

テントの入り口を開けると、とても食欲を刺激する匂いが漂っていた。

「だんにゃさん、これが真のこんがり肉！その名もこんがり肉グレートだにゃ！！」

とてつもなく美味しそうなこんがり肉を持ったグンジョーが、自信たっぷりにその肉を掲げる。私は、思わずのどを鳴らしてしまった。

「さあ、召し上がれにゃ」

グンジョーが差し出した肉を慎重に受け取る。色、香り、それは私が今まで食べたどのこんがり肉よりおいしそうだった。

「い、いただきます…」

意を決して、私はグンジョーのこんがり肉にかぶりついた。

それは、言葉ではとても言い表せられないような、まさしくグレートな味わいだった……。

「あ、あった」

木の根本に生えたキノコの中に、依頼目的の特産キノコを見つけ、採取する。

空を見上げると、ちょうど太陽が真上に上っていた。

今日は、ずっとジャギイを追いかけるなんて事はせずに、ある程度追い払ったらキノコの採取に取りかかった。ちよつと追いかけて体が疼いたのは、グンジョーには内緒である。

「この調子なら、もしかして今日中に終わっちゃうんじゃない？」

このキノコで丁度十本目、目標数の半分を集めたことになる。

私はアイテムポーチに特産キノコを入れ、隣でキノコを採取しているグンジョーに話しかけた。

「むう、確かに終わりそうだな。でも、こんなに順調でいいのにかやあ？」

グンジョーは何か納得できない様子だ。

「まあ、初心者用のクエストなんて、こんなもの何じゃないの？」

「うーん、僕が心配性なだけかもしれにゃいけど、何か変な感じなのにゃ」

そう言ってグンジョーは首をかしげる。

確かにジャギイは頻繁に見かけるが、危険なモンスターなんてそれくらいで、他に心配するような事は無かったと思うのだが…。

「まあ、大丈夫だつて。それより、早くキノコを集めちゃいませよ」

「……わかったにや、確かにずっと気にしててもしょうがないにや」

そうして、私とグンジョーはキノコ採取を再開した。

この場所での収穫数は、私が3本で、グンジョーが2本の計5本だ。中々の収穫である。

「だんにやさん、ここら辺にはもうなさそうだし、そろそろ別の場所を探さにやいかにや？」

「そうね、でもその前にちょっとこれ食べさせて」

ポーチから携帯食料を二つ取り出し、グンジョーに見せる。ちよっとお腹が空いたのだ。

「だんにやさんはよく食べるにやあ」

しみじみといった感じに言うグンジョー。

昨日、グンジョーの焼いたこんがり肉を3本も食べたからか、私は大喰らいと認識されたようである。

真に遺憾である。あれは、グンジョーのこんがり肉が旨すぎたのがいけないのだ、普段からあんなに食べるわけじゃない。

まあ、確かに人よりもちよっと多めに食べるけど……。

「グンジョーも食べる？」

携帯食料二つの内一つをグンジョーに差し出した。二つ食べるのではなく、一つはグンジョーにあげるために取り出したってことにして誤魔化すのだ。少しは、私に対する認識を改めてくれるかもしれない。

「ボクは甘いのが苦手だからいらなにゃ」

携帯食料は即座にエネルギーを補給できるように、糖分高めでかなり甘い。私は結構好きだが、苦手なハンターもたまにいるらしい。

「あ……そう」

結局、私は二つ食べたのだった。

「やっぱり、そう上手くいくわけなかったのにゃ……」

だいぶ日が傾いてきた。

あれからしばらく特産キノコを探していた僕と旦那さんは、キノコの群生した場所を見つけたのだが……。

「なんで特産キノコだけなのよ！」

悔しがる旦那さん。

クタビレタケにニトロダケ、毒テングダケと何種類かのキノコは

生えているのだが、肝心の特産キノコだけが生えてないのだ。
元々生えてなかったという感じではなく、何かに食べられた様子である。

「だんにゃさん、オルタロスって知っているかにゃ？」

「オルタロス…って、何だっけ？」

首をかしげる旦那さん。

「平たく言えば、でかい虫だにゃ。ほら、おしりが袋みたいになっている奴だにゃ」

「あー、あれね。あの虫がどうかしたの？」

「たぶん、ここの特産キノコを食べたのはオルタロスだにゃ」

オルタロスには、キノコや蜂蜜などを腹部の袋に入れて巣に持ち帰るという習性がある。きっと近くにオルタロスの巣があるのだろう。

「何よそれ、じゃあ下手すれば全部あの虫に食べられてるかもしれないの!？」

「まあ、そんなにことはまずありえないと思うけど、この辺にはもう無いかもしれないにゃ」

たとえ特産キノコ残っていたとしても、きっと一本か二本ぐらいで目標の数には届かないだろう。他にキノコが生えている場所を探した方がいい。

「くっそー、あの虫どもめ。今度私の特産キノコ食いやがったら、その腹かつさばいてやる!!」

「だんにゃさん、ここはあきらめて、別の場所を探したほうが良いと思うにゃ」

地団駄を踏んで、過激なことを叫ぶ旦那さんに声をかける。

「はあ……って、あれ？」

旦那さんが急に動きを止めて、ある一点を見つめ出した。

「だんにゃさん、どうしたのにゃ？」

僕も旦那さんと同じ方を見る。

そこには、件の虫が、オルトロスが何かを食べてる最中だった。

「グンジョー、あれってオルトロスよね？」

「オルトロスだにゃあ……」

「何を食べてるのかな？」

「きつと特産キノコだにゃ」

「……………」

無言で片手剣を構える旦那さん。

何やら、近寄りがたい雰囲気をかもし出している。

「だ、だんにゃさん…？」

そう声をかけた瞬間、一直線にオルトロスへと飛び掛る旦那さん。その気合…というか恨みのこもった一撃にひっくり返り、ぴくぴく痙攣して動かなくなるオルトロス。

旦那さんは絶命したオルトロスに近づくと、宣言どおり腹をさばきだした。

いや、まあ雰囲気が何か恐いだけで、普通に剥ぎ取りしているだけなんだけどね。

「あつたー！ あつたよグンジョー、これであと五本だね」

オルトロスの袋から、キノコを取り出して喜ぶ旦那さん。

「だんにゃさん……喜んでるとこ非常に言いにくいのにやけど…」

「何よ？」

「残念にゃがら、そのキノコはもう特産キノコじゃないのにゃ……」

オルトロスは袋の中に特殊な体液を精製し、取り込んだキノコを熟成キノコと言う物に変質させてしまうのだ。たった数秒とは言え、一度オルトロスに食べられてしまえば、それはもう特産キノコとは呼べないのだ。

「そ、そんなあゝ」

地面にひざを着き、うなだれる旦那さん。

「まあ、また明日頑張つて探そうにや。それに、熟成キノコは料理とかに使えるから結構高く売れるのにや、無駄じゃないにや」

僕は、ポンつと旦那さんの肩に手を置く。

気づけばもう夕暮れだ、そろそろキャンプに戻らなければ。

「これ…食べられるの？」

「……そのまま食べるのは、さすがにどうかと思うのにや」

「い、いや…私だつてそのまま食べたりしないよ。ちょ、ちょっと聞いてみただけ」

何か目が泳いでいる。

本当にそのまま食べる気だったらしい。

「ひにゃあー！」

かろうじてジャギイの攻撃をかわしたグンジョーが、バランスを崩してゴロゴロ転がる。

「てえい！」

私への注意が散漫になり、隙だらけになったジャギイに、勢いを

つけて片手剣を振り下ろす。

少し浅かったのか、後ろに吹き飛ぶだけで、まだ絶命はしていない様子。

反撃の隙を与えないため、すかさずジャンプで距離を詰め、そのまま体重をのせて切りつけた。切り口から血を吹き出し、今度こそ息絶えるジャギイ。

「ふう…」

辺りを見回し、ジャギイがもういないことを確認してから警戒を解いた。

「相変わらず、だんにゃさんは強いにゃあ…」

上半身だけ起こしたグンジョーが、しみじみと言う。

「そう言うグンジョーは、モンスターと戦うのが苦手？」

「にゃはは、面目ないにゃ」

クシクシと、手でおでこをこすり謝るグンジョー。

「まあ、苦手なことって誰にでもあるものだしね」

「だんにゃさんにも、苦手な事ってあるのかにゃ？」

首をかしげるグンジョー。

「私？ そうねえ、強いて言うなら調合とか細かい事が苦手かな」

調合とは、ハンターの基本技術の一つだ。アイテム同士を組み合わせて、別のアイテムに作り変える技である。調合は少しでも分量を間違えたりすると、アイテムがまったく使い物にならなくなってしまうのである。

そのため、調合のレシピは秘伝であり、そのほとんどが世に出回っていない。

私が知っているレシピなんて、初心者講習で特別に教えてもらえる回復薬ぐらいである。

「調合にやら、ボク得意だにや。オトモ志望のアイルー達の中じゃあ、一番のうでだったにや」

調合という言葉聞いたとたんに立ち上がり、自慢げに胸を張るグンジョー。

「オトモアイルーって、調合も出来るの!？」

ちょっとビックリな事実である。

「まあ、熟練のオトモなら、誰でもしびれ罫くらいは作れるのにや」

「ふーん、グンジョーも？」

「余裕だにや」

見栄を張っている感じでもないし、きっと本当に得意なのだろう。私とグンジョーは、結構良いコンビになれるかもしれない。

「じゃあ、そろそろキノコ探しを始めよっか」

「分かったのにや」

クエスト三日目、今日中には目標数を採取したいところである。ほどほどに話を切り上げ、私達は特産キノコを探し始めるのであった。

「だんにゃさん、あったにゃ！」

旦那さんに見えるように、採取した特産キノコを手にとって掲げる。

「こつちもあったよー、ようやく終わりだね」

旦那さんも採取したキノコを僕に見せる、これで丁度目標数の二十本だ。

あとは納品用ボックスに入れて、明日の昼頃やつてくる予定の迎えの竜車に積み込んで帰るだけである。

「ちょっとあせったけど、にゃんとか間に合ったにゃ」

気がつけば、もう日が暮れ始めている。

実質今日が最終日なので、あのまま見つからなければ、夜間も探索を続けなければならなかった。一安心と言ったところだ。

「ほらね、言った通り何とかなったでしょ？」

「まあ、結構ギリギリだったけどにゃ」

一日目を潰してしまったときはどうなるものかと思ったが、意外と何とかなるものである。途中で感じた変な感覚も、きつと心配性な僕の杞憂だったのだ。

「よしつと、じゃあキャンプに戻ろう。私お腹空いちちゃった」

採取したキノコをポーチに詰め終えた旦那さんが、お腹をさすりながら笑う。

「にやはは、だんにゃさんはそればっかだにゃあ。……まあでも、それでこそだんにゃさんだにゃ」

キャンプに戻ったら、腕によりをかけてご飯を作ってあげようと思う。まあ、ご飯とは言っても、こんがり肉なのだけど……。

「こんがりこんがりこんがりにくく、じい」

何か、ノリノリで妙な歌を口ずさむ旦那さん。こんがり肉グレートがよほど気に入ったらしい。

この様子なら、きつと三日連続同じメニューでも問題ないだろう。

「何だにゃ、その妙な歌？」

「今の私の心境を歌った歌よ」

「……初クエスト達成の喜びとかにゃいのかにゃ？」

ちなみに、僕は結構達成感みたいなモノを感じている。

「うーん、そりゃあちょっとは嬉しいけど……」

顎に人差し指を当てて、何か考えるような仕草をする旦那さん。

「こんがり肉グレートを食べたときの衝撃に比べると、ちょっと弱
いかなーって」

「……………」

絶句する僕、さすがは旦那さんである。

「にーくにーくにつく、こんがりいー」

再び妙な歌を口ずさむ旦那さん。

何か、さっきとリズムが違う気がするが……。まあ、楽しそうだし、気にしないでおう。

こうして、僕と旦那さんの初クエストは、無事に終了したのだ
た。

二話・はじめてのクエスト（後書き）

何とか投稿。という方向に話しを進めるのか悩んでいたら、
いつもより時間がかかった。

三話・緊急のクエスト 上（前書き）

何かびみよーな文章。

三話・緊急のクエスト 上

それは、初めてのクエストを終えてから、2日目の朝のことだった。

いつもより少しだけ遅く起きた私は、机の上にご飯と数種のおかずが置かれていることに気がついた。

恐らく、グンジョーが作っておいてくれたのだろう。

実に、美味しそうだ、本当に便利なアイルーである。

「……いただきます」

両手を合わせて、食材に感謝を告げる。

右手に箸、左手には茶碗を持ち、いざ食べようと思ったその時。

「ハンター様、いらっしゃいますか？」

コンコンという控えめにドアを叩く音の後に、私を呼ぶ村長さんの声が聞こえた。

「あ、はい、すぐに出ます」

私は茶碗を置き立ち上がると、急いで入り口のドアを開けた。そこには、何やら少し慌てた様子の村長さんが立っていた。

「あら、お食事中でしたか？」

村長が、私の右手の箸を見ながら言う。

「あ、まだ食べ始める前でしたから……。それで、どうかしたんですか？」

私は、慌てて手に持ったままの箸を体の後ろに隠す。いや、まあ別に隠さなくてもいいのだけど、何か真面目な話しのようだから……。

「それが昨日、一昨日までハンター様が行っていた渓流付近で、行商のかたがジャギイの群れに襲われたそうなのです」

「ジャギイの群れ、ですか？」

そういえば、クエストの最中、妙にジャギイと遭遇した。

「ええ、幸い行商のかたは無事だったのですが、妙に統率が取れた動きをしていたそうで、もしかしたら群れにリーダーがいるかも知れないらしいのです」

「リーダー…、ドスジャギイってヤツですよ」

私はまだ見た事はないが、何でも通常のジャギイよりずっと強いらしい。

「それで、ハンター様にそのジャギイの群れの討伐をお願いしたいのです」

「え、あ、はい。疲れてはいないし、全然大丈夫ですけど……こういうのって、もっと経験をつんだハンターに任せるものじゃないんですか？」

何か一大事っぽいが、私なんかで良いのだろうか？
私まだ、キノコ集めしかしてないのだけど。

「ええ、本当ならこういうクエストはハンター様が、もう少し経験を積まれてから頼むのですが……。運の悪い事に、村に居た他のハンター様達は皆出かけてしまっているのです」

どうやら、今村には私しかハンターがいないらしい。そして、新米の私に頼るしかないほどの緊急事態のようだ。

「分かりました、私に出来る限りはやってみます」

そう言っ、私は早速クエストの準備に取り掛かるのだった。
今度のクエストは、初の討伐クエストだ。準備は念入りにしなければ……。

「まずは、そうね……とりあえず朝ごはんかな」

実は、村長との会話中、お腹が鳴りそうだったのは秘密である。

「グンジョー、ドスだよドス！ ドスジャギだよ！」

農場で色々調合する僕の元へ、妙なテンションの旦那さんがやってきたのは、太陽がだいぶ昇ってきた頃だった。

「……だんにゃさん、それだけじゃあ、何がやんだか分からないのじゃ」

ドスジャギイというのは競争を勝ち抜いた雄のジャギイで、若いジャギイの二、三倍の体格を持つ群れのリーダーである。

そのドスジャギイが、どうかしたのだろうか？

「村長さんに新しいクエストを依頼されたの、前のクエストで行った溪流で、ドスジャギイの討伐！」

やはり、何か妙にテンションが高い。

「……だんにゃさんには、まだ早くないかにゃあ？」

旦那さんは、まだ一つしかクエストをこなしていないのだ。

確かに、ドスジャギイはそこまで強いモンスターではない。だが、新米ハンターが簡単に倒せるほど弱い訳ではないのだ。

あと、二つか三つくらいクエストをこなしてから、受けるべきだと僕は思う。

「まあ、私もちょっと早いかなーって思うけどさ。緊急事態で、今村には私しかハンターがいないらしいの」

「……緊急クエストってやつだにゃ」

ハンターにランクがあるように、クエストにもランクがある。

本来なら、ハンターはランクに合ったクエストしか紹介されないが、緊急の場合のみ少し上のランクのクエストを紹介される事がある。それを緊急クエストと呼ぶのである。

「でも、緊急事態にやのに、旦那さんは何でそんなに機嫌が良さそうなのにな？」

こう、普通はもつと緊張したりするものじゃないのだろうか？

「え、いやー、だってさ。ハンターといえば大型モンスターの討伐だし、何かこう……やっと私もハンターになったんだって言う実感が湧いてくるのよ！」

旦那さんが、実に生き生きとしている。この前のクエストは性に合わなかったらしい。

キノコ集めとかの、採集クエストも立派なハンターの仕事だと思うけどなあ……。

「クエスト期間はどれくらいですよ？」

「とりあえず今日中に準備を終わらせて、明日出発。それから七日間よ」

七日か、今回は塩漬け肉以外にも、色々保存の利くものを用意して行く。

こんがり肉はボリュームがあり、腹持ちするので狩りには最適だけど、ずっと肉だけというのは、さすがの旦那さんでも飽きるだろう。

「あと、七日後には他のハンター達が戻ってくるらしいから、ドスジャギイが倒せそうにないなら、ジャギイの群れの数を減らすだけでも良いってさ。もちろん、その場合は報酬が減るけどね」

そう語る旦那さんの目からは、絶対にクエストを成功させてやるという強い意思のようなものが感じられた。

これは、僕も気合を入れないといけないようだ。

渓流に到着して、テントなどキャンプの準備を終えた僕と旦那さんは、どのように行動するか話し合う事にした。

「まずは、ジャギイ達の巣を見つけるのが良いと思うのにな」

ドスジャギイは、自分の縄張り中を移動する。そのため、先に巣を見つけて、縄張りの範囲を予測しておいた方が良さだろう。

「うーん、巣って言うってもなあ……。この前のクエストじゃあ、そんな感じの場所なんてなかったよね？」

「だんにゃさんが、まだ行ってないところにあるんじゃないかな？」

キノコ採取をしていた時、僕と旦那さんは頻繁にジャギイに襲われた。恐らくだが、ドスジャギイはあの時すでに、この渓流を縄張りにしていたと思われる。

そう考えると、中々運がよかったのかも知れない。ろくに準備をしていない状態で、大型のモンスターと戦うなんて御免である。

「行ってない所って言われてもなあ……」

何か首をかしげる旦那さん。

「……もしかして、覚えてないのかな？」

ないと思うが、一応聞いてみる。

「……うん」

小さくうなずく旦那さん。

何て言うか、ダメダメである。

「だんにゃさん、よくハンターになれたにゃあ……」

「は、ハンターに一番重要なのは、いかに上手くモンスターと戦えるかだから良いのよ」

そう言つて、目をそらす旦那さん。

まあ、自覚はあるようだから、きっと大丈夫だろう。

「……まあ、ボクが覚えているから良いかにゃ」

モンスターとの戦闘では、僕はほぼ役に立てていない、旦那さんにまかせっきりだ。だから、旦那さんの苦手なところは、頑張つて僕が補おうと思う。

「じゃあ、とりあえず、行つてないところを探していこつか」

「だんにゃさん、ジャギイの巣の近くにはジャギイノスがいるにゃ。だから、ジャギイノスを探すのがいいにゃ」

「ジャギイノスってジャギイの雌だよね？」

「そつだにゃ」

ジャギイノスというのは、旦那さんの言つとおりジャギイの雌で、若い雄のジャギイより一回り大きな体躯を持っている。群れでのジャギイノスの役割は、主に子育てと巢の防衛である。

そのため、ジャギイノスを見つけたら、近くに巢がある可能性が高いのである。

こうして話し合いを終え、僕と旦那さんは狩場に向かうのだった。

「あれがジャギイノスね」

茂みの影に身を隠し、気づかれないように、小声で言う旦那さん。もうすぐ日が暮れるというとき、大きな滝の付近で五匹のジャギイを見つけたのである。その内、二匹は他より一回り大きな体躯をしている。

「初日に見つけられるとは、運がいいにや」

小声で、ボソリとつぶやく。

ジャギイノスがいるということは、この辺に巢があるのだろう。巢を特定するのに二日ぐらいかかると思っていたので、初日にしてはかなりの収穫である。

「だんにゃさん、ジャギイ達に気づかれないように、この場を離れるにや」

もうすぐ日も暮れることだし、今日はもう引き上げたほうが良いだろう。小声でそう言って、旦那さんの方を見ると――

「……だんにゃさん？」

先ほどまで旦那さんがいた場所には、何故か誰もいなかった。

「てええい！」

そして、何故かジャギイ達の方から聞こえる旦那さんの声。いつの間にか、旦那さんが一番近い位置にいたジャギイに切りかかっていたのである。

不意の一撃を受けて倒れるジャギイ。他のジャギイ達が旦那さんに気づき、騒がしく鳴き始める。

「何か、前にもこんなにやことがあったようにや……」

思えば、特産キノコ採取のクエストでも、旦那さんはジャギイに突撃していった。

どうも、旦那さんはモンスターに突っ込む癖があるようだ。ジャギイなどの小型モンスターのうちはまだいい、だが大型モンスター相手だとまずい事になる可能性が高い。

何故この様な癖がついてしまったのかは分からないが、早めになおした方が良いだろう。

「ととつ、こんな事を考えてる場合じゃにゃかったにゃ」

ジャギイ達に囲まれている旦那さん。

役に立つかは分からないが、僕も加勢しなければ！

「ジャギイどもめ、僕が相手だにゃあ！」

肉球ネコぱんちを力強く握り締め、気合を入れる。
大声で叫ぶと、僕は茂みから飛び出したのだった。

「くそつ、こいつら全然減らない！」

日も落ちかけ、段々薄暗くなつて行くなか。
倒しても倒しても、次々と現れるジャギイに、私達は苦戦を強い
られていた。

「だ、だんにゃさん、引き上げた方が良くないかにゃ！？」

グンジヨーも、ジャギイ三匹に囲まれてかなり参っている様子で
ある。

「こいつら、どこから湧いてくるのよ……」

このままではきりが無い、無駄に体力を消耗するだけだ。グンジ
ヨーの言う通り、ここはいったん引いた方がいいかもしれない。
完全に私のミスだ、ジャギイ五匹ぐらいどうとでもなると、考え
無しに突っ込んだ結果がこれである。応援を呼ばれ、近くにあるで
あろう巣から、続々と現れるジャギイの群れ。

「だんにゃさん、滝だにゃ！ こいつら、滝の裏から出てきている
にゃ！」

グンジヨーの声に反応して滝を見ると、新たに二匹のジャギイが
滝の裏から出てくるのが確認できた。私の視線が滝に向いたのを好

機と見たのか、一匹のジャギイが口を開けて襲い掛かってくる。

ジャギイの顔を盾で殴りつけるようにして受け流し、隙だらけの首にユクモノ鉈を叩き込む。今まで倒したジャギイの血がベツトリと付いたユクモノ鉈は、切れ味が悪く、途中で引つかかるように止まってしまった。

「このオ！」

ジャギイを蹴りつけ、その反動で鉈を引き抜く。蹴り飛ばされたジャギイは、少しよろめくとバックステップで私から距離をとり、威嚇するように低くうなる。

一撃で致命傷を与えられなくなってきた。

武器の劣化と、体力の減少による疲れと集中力の低下。

正直、もう長く戦ってられる状態じゃない。

「グンジョー、一番手薄なところを突破しよう！」

私は、そう大きな声で言って、ジャギイの一番少ない方向へ走り出した。

「ま、待つてにやだんにやさん！」

上手くジャギイ達をかいくぐり、グンジョーが後を追ってくる。

私達を逃がさないように二匹のジャギイが行く手を塞ぎ、威嚇をし続ける。

「てええい！」

走る勢いそのまま、盾で一匹を殴りつけた。ひっくり返るように吹っ飛ぶジャギイ。

そして隙が出来た私に、もう一匹のジャギイが飛び掛かろうとすると――

「やらせにゃいにゃあ!」

グンジョーが投げた肉球ネコぱんちが、ジャギイの頭に当たり軽い打撃音を出した。

グンジョーに意識をそらすジャギイ。

すかさず、そのジャギイをユクモノ鉈で切りつける。

悲鳴をあげて飛びのくジャギイ。倒せはしないが、逃げるには十分な隙である。

「行くよ、グンジョー」

自分の武器を回収しているグンジョーに一声かけると、私は全力で駆け出した。

「だんにゃさん、追いて行かにゃいでにゃ〜!」

こうして、私達はジャギイ達を振り切る事に成功したのであった。

三話・緊急のクエスト 上（後書き）

ということで、二回目のクエストは討伐クエストです。

とりあえず投稿。

三話・緊急のクエスト 中

「とりあえず、今日の反省と明日の作戦会議をしよう」

キャンプに帰って早々、そんなことを言う旦那さん。

「……だんにゃさん、どうかしたのかにゃ？」

キノコ採取のクエストの時は、キャンプに帰るたび一言めには、お腹すいた〜とか、ご飯作ってグンジョーとか言っていた旦那さん。その旦那さんが、一言も食事関係の言葉を口にしないなんて……。

「雨、降るかもにゃ……」

「グンジョー、どうしたの？」

ボソリとつぶやいた一人言が聞こえたのか、旦那さんが不思議そうに僕を見る。

「いや、だんにゃさんが食べ物のことを言わにゃいなんて、珍しいと思ったただけだにゃ」

「む……失礼な、その言い方だと、私が食べ物の事しか考えてないみたいじゃない。そりゃまあ、お腹空いてるけどさ……」

やはり、旦那さんの頭の中には、いつも食べ物の事があるようである。

「さすがに、今日みたいな結果で呑気なことばかり考えてられない

のよ」

若干悔しそうな旦那さん。

「凄い数のジャギイだったにや、あれにドスジャギイまで加わっていたら、かなりまずいことになっていたかもしれないにや」

そして、ドスジャギイと戦うときは、そんな状況になる可能性が高いのである。

「そう言うこと、正直ジャギイなんて何匹いても同じだーって、あなどってた。だから、今日と同じ結果にならないために、作戦をたてるの」

巢の中から出てきた奴らだけでも、二十匹以上は居た。巢に居るジャギイがあれで全てなんてあり得ないだろうし、縄張りを巡回しているドスジャギイなどを考えると、相当大きな群れなのかもしれない。

「と言う事で、グンジョーは何か良い案ない？」

「だんにゃさん、いきなり丸投げかにや……」

「いやー、私そついうこと考えるの苦手だし」

急にそんな事言われてもなあ……。

こうして僕は、ジャギイの群れを何とかする作戦を考えるのであった。

「いただきます」

私は両手を合わせると、目の前に置かれた焼きたてのこんがり肉を手にとった。

こんがり小金色に焼かれたそれは、見た目も匂いもまさしく理想のこんがり肉といえるのではないだろうか？

目と鼻で味わい、いざこんがり焼かれたその肉にかぶりつこうとした、その瞬間――

「それだにゃ！」

突然、座り込んで頭を捻っていたグンジョーが立ち上がり、私のこんがり肉を指さしたのである。

「ひゅうにろうひたの？」

いきなり大声で言うものだから、ちょっとびっくりしてしまった。こんがり肉を一口かじりながら、私はグンジョーに尋ねた。

「だんにゃさんが食べているこんがり肉を見てピンと来たにゃ、中々の妙案かもしれないにゃ。あと、食べながら喋るのは行儀が悪いにゃ」

どうやら、作戦を思いついたらしい。

しかし、こんがり肉を見て思いつく作戦って、いったいどんな作戦なのだろう？

「ジャギイの巣に毒入りのエサをばら撒くにゃ、上手くいけば結構

な数を無力化できるかもしれないにや」

「……結構えぐい手段だよね」

正直、進んでそういう方法を取りたいとは思わない。だが、今は手段とか選んでいられる状況ではないのである。

「まあ、確かに有効そうだし、他に思いつく方法もないしね……その作戦で行こうか。でもさグンジョー、毒入りのエサって何を使うの？」

当然、私はそんな物持ってきてない。グンジョーも、それらしき物は持つて来てなかったと思うのだが……。

「これを使うのにや」

私が尋ねると、おもむろに鞆からキノコを取り出すグンジョー。

確か、毒テングダケというキノコだ。

そういえば、この間のクエストで、グンジョーが色々なキノコを採取していたのを思い出した。

「……ジャギイって、キノコ食べるの？」

「さあ、たぶん食べにゃいんじゃない？　というか、誰もこのまま使うとは言っていないのにや」

両手を顔の横に広げて、やれやれといった風に首を振るグンジョー。何かコイツ、少しずつ私に対する態度が悪くなっているのか？

「じゃあ、どう使うの？」

とりあえず、聞いてみる。

「この塩漬け肉と組み合わせる使うのにや」

そう言って、いくつかの肉を取り出すグンジョー。

「こうやってだにや……」

グンジョーが毒テングダケを石ですり潰すと、毒々しい色の液体がキノコから分泌された。

その液体を、塩漬け肉に塗り付け始めるグンジョー。

「え、ちょ……それ、明日の夕食用じゃ……」

「毒入り肉の完成だにや！」

嬉しそうに、毒入り肉を掲げるグンジョー。

「私の肉があ……」

こうして多大なる犠牲の元、明日の作戦が決定したのだった。

「……………」

息を殺し、木陰からそっとジャギイ達の様子を覗く。

昨日の襲撃を警戒してか、二匹ほど数が多い。

「大丈夫、昨日と同じ事をするだけ……」

私は、自分にだけ聞こえるような音量で、自分に言い聞かすようにつぶやいた。

私が今からやる事はとても簡単な事だ、昨日と同じようにジャギイと戦うだけ。ただ一つ昨日と違う事は、そばにグンジョーがいないという事だけである。

グンジョーが立てた作戦は、一人が囷になってジャギイ達をひき付けている間に、もう一人が巢に侵入して毒餌をばら撒いて来るという単純なものである。

囷役が私で、侵入役がグンジョー。今日は別行動なのだ。

グンジョーは戦闘ではほとんど役に立たない。

言い方は悪いが、居ても居なくてもあまり変わらない。

だから、グンジョーが居なくても、別に何も問題ない。何も問題はないのだ。

それなのに……心細いと感じてしまうのは、何故なのだろうか？

よく分からない。

「って、何考えてるんだ私は……」

ブンブンと頭を振って、思考を切り替える。

今は、目の前の事に集中しなければ。

「大丈夫、やれる……」

再び、自分に言い聞かすようにつぶやく。そして、腰に下げた武器、ユクモノ鉈の感触を確かめながら、一番近いジャギイに狙いを定めた。

思いきり地面を蹴り、一気にジャギイへと接近。

「てりやあー！」

勢いそのまま、掛け声とともに抜刀したユクモノ鉈を振り下ろした。

切り口から血を噴出し、断末魔の悲鳴をあげて倒れるジャギイ。仲間を殺されて、ようやく私に気づいたのか、ジャギイが騒がしく鳴き始めた。巢に近い位置のジャギイが高い音で鳴きだし、他のジャギイは私を威嚇するように低くうなる。

おそらく、あの高い鳴き声が仲間を呼ぶ合図なのだろう。数匹のジャギイが、昨日と同じく滝の裏から飛び出してきた。

とりあえず成功。後は、グンジョーの方が終わるまで、ここで戦い続けるだけだ。

「くらえー！」

気合を込めて、接近してきたジャギイを切りつける。狙い通り、ジャギイの首を切り裂くユクモノ鉈。武器の状態は良好、お腹も減っていないから、しばらくの間は戦っていられるだろう。

「……次！」

私は次のジャギイに狙いを定め、ユクモノ鉈を握りなおし、思いきり走り出したのだった。

「始まったみたいだよ」

騒がしく鳴きだすジャギイ達、どうやら旦那さんが戦闘を開始したようだ。

広く薄暗い鍾乳洞、その中に並ぶ石柱、そして無数のジャギイ達。ここは滝の裏にあるジャギイ達の巣である。

自分で言うのもなんだが、アイルーという種族は結構多才で、様々な特技を持っている。その一つが地中移動、つまりは穴掘りである。

旦那さんと別れた後、僕は地中を移動して、ジャギイの巣に進入したのだ。現在、石柱の一つに身を隠し、ジャギイの様子をうかがっている最中である。

ジャギイ達は、ある程度鳴き続けた後、続々と入り口から外に出て行く。

今頃、旦那さんの方は、昨日と同じような状況になっているだろう。

旦那さんは新人ハンターとは思えないくらい上手に戦う。

旦那さんの実力なら、少しの間は大丈夫だろうが、ジャギイの群れに包囲された状態ではそう長くは持たないだろう。なるべく早く、僕の役目を果たさなければいけない。

「……………」

じつと息を潜めて機会をうかがう。

ジャギイ達は次々と巣から出ては行くのだが、軽く見ただけでも二十匹以上がまだ残っているのだ。ジャギイだって馬鹿じゃない、侵入者が置いた怪しい食べ物など口にしないだろう。

気づかれてはいけないのだ、行動するなら、せめて十匹以下になつてからだ。当然、巣が空になるなんて事はないだろうから、それ以降は僕しだいなのだけだ。

そんな事を考えていたときである。

「……なにや？」

突然、巣の入り口である滝の向こう側から、ジャギイのものとは違った、響くような低音の鳴き声が聞こえてきたのだ。すると、巣の中に残っていたジャギイ達が入り口の方へ移動し始めたのである。あつという間に空になるジャギイの巣。

「よくわからないけど、チャンスなのは間違いないにや」

ポーチから、昨日作成した毒肉を取り出して、設置場所を見定めだした。

今持っている毒肉の数は3個、設置場所を誤るとほとんど効果が出ないなんて事も有りえるのだ。慎重に設置しないといけない。

本当はもっとたくさんの毒肉を持ってきて、巣のいたるところに設置しようと思っていたのだが、3個までしか僕のポーチには入らなかったのだ。大きな誤算である。

「とりあえず、一個はここにやるかにや」

たまたま、食べかけの死体が有ったので、それに混ぜるように毒肉を設置した。形からして、恐らくこの死体は、溪流に生息するガーグアと言つ鳥竜種のものだ。襲われてからしばらく経つのか、変色した肉が、毒肉の違和感をかき消している。

こうして、僕は巢の中に毒入り肉を設置していくのであった。

「何よ、コイツ……」

それが現れたのは突然の事だった。

急に背後から、ゾクリとした、得たいの知れない何かを感じて振り返る。

そこには、私が今まで戦ってきたジャギイの数倍の体躯を持つ、大きなジャギイがこちらに向かってきていたのだった。

「こいつが、ドスジャギイ……」

さすがに群れのリーダーらしく、ただのジャギイとは比較にならない威圧感がある。

ドスジャギイが、低音の響くような声で鳴き出した。いや、鳴くと言うよりは、ほえるといった方が適切かもしれない。

グンジョーいわく、ドスジャギイは、鳴き声で仲間達に指示を出すらしい。今の鳴き声は仲間を呼ぶもののようで、いつの間にか元いた数の倍ぐらいにジャギイが増えている。

ドスジャギイもいることだし、ジャギイ達をひき付けるのは成功だろう。あとは、グンジョーが仕掛けを終えるまで、この状況を維持すれば良いだけだ。

「さあ、来い！」

ユクモノ鉈を握りなおし、盾を構える。そして、威嚇するようにドスジャギイを睨みつけた。

足踏みのような動きをしてから、再度ほえるドスジャギイ。先ほどとは違い、少し高めの鳴き声で鳴いている。

ドスジャギイが鳴き終わると同時に、一匹のジャギイが飛び掛ってきた。いつものように盾で受け流す。

そして、攻撃しようと鉈を振り上げると――

「つく、このつ！」

別のジャギイが、反対方向から襲い掛かってきた。

慌てて回避すると、今度はまた別のジャギイが噛み付こうとしてくる。

「こいつら急に動きが……！」

次々と、断続的に攻撃してくるジャギイ達。先ほどまでの、数が多かっただけのときは違い、まったく反撃する余裕がない。

ドスジャギイがいるかいないかで、こつも違いがあるとは……。

こんな風に攻められ続けたら、すぐに体力が尽きてしまう。

「つち、このままじゃジリ貧ね」

舌打ちすると、飛び掛ってきたジャギイを強引に切りつけた。

カウンター気味の攻撃を受け、ひっくり返るように吹き飛ばすジャギイ。

「つく」

同時に、右肩を爪で引っ搔かれ、顔をしかめる。防具の上からだったため、軽傷ですんだのは運が良かった。

私は、僅かに出来た隙を逃すまいと、ドスジャギイに向かって思

いきり駆け出した。

受けに回っただけではダメだ、こちらから攻めて行かなければ……。作戦変更である。

まずは、指揮をとっている奴、ドスジャギイを攻撃してジャギイ達のペースを乱す。

「でええーい!!」

ドスジャギイに向かって飛び掛り、顔面目掛けてユクモノ鉦を振り下ろす。

しかし、ドスジャギイは横に跳ねるだけで、簡単に避けてしまった。やはり、ただのジャギイと違って、一筋縄ではいかない相手のようだ。

隙のできた私に噛み付こうとするドスジャギイ。咄嗟に、低い姿勢のまま地面を蹴って、前転するように回避する。

「このお!!」

起き上がりざまに鉦を振り上げるようにして切りつけるが、ドスジャギイの皮を少し切るだけに止まってしまった。

バックステップで、私から距離をとり、威嚇するようにほえるドスジャギイ。すぐさま他のジャギイ達がこちらに走ってきて、私をぐるりと取り囲む。

「またこれか……ん?」

うんざりと、私がつぶやいたそのときだ。

「だんにゃさん、終わったのにゃー!!」

足元の土が急に盛り上がり、中からグンジョーが飛び出てきたのである。

どうやら、毒肉を設置し終えたようである。

「よし、じゃあこれを突破して、さっさと逃げるよ」

いきなりグンジョーが現れた事に動揺しているのか、距離をとって中々襲い掛かって来ないジャギイ達。

こちらにとっては好都合である。

「分かったにやって、何にやのこの数は!?!」

周りを見ていなかったのか、今更ジャギイに包囲されていることに驚くグンジョー。

「いいから、ほら!」

「にや、にやあ!?!」

グズグズしていると、またジャギイ達に休む間もなく襲われることになってしまう。

私は、グンジョーの首根っこを掴んで持ち上げ、一番突破しやすいような方向へ駆け出すのであった。

三話・緊急のクエスト 中（後書き）

何かハンターの性格が……。

とりあえず投稿。

三話・緊急のクエスト 下

「……グンジョー、別にこれくらいの傷なんて、ほっといても治るよ。だから、別にそういうのは——」

「ちゃんと手当てをしとかないと、後で後悔することになるかもしれないから、我慢するにや」

そう言つて、旦那さんの肩に出来た傷口に、すり潰した薬草を染み込ませた布を押し当てた。

現在、キャンプのテント内にて、旦那さんの怪我の手当ての最中である。

「ひぐつ……」

ビクツと体をふるわせて、少し涙目になる旦那さん。勇猛果敢にジャギイ達との戦闘を繰り返していた旦那さんとは、まるで別人のようである。

「だんにやさん、そんなに痛かったのかにや？」

首をかしげて、旦那さんに尋ねる。

少しはしみるが、それほど痛みはなかったはずなのだが……。

「私、昔っからこういうのが苦手で……」

「あー、まあ確かに、怪我の痛さとはちょっと違う感じだしにや」

どうやら、旦那さんは傷薬などの、しみるような痛みが苦手らし

い。ちなみに、僕はそういうのは結構平気だったりする。

「とりあえず、これで終わりだにゃ」

薬草の染みた布が傷口からずれないように、別の布で巻いて固定した。ただ傷口を消毒しただけの、簡単な手当でだが、ハンターである旦那さんならこれで十分だろう。

ハンターは、普通の人よりも再生力が強く、小さな怪我ならすぐに治ってしまうのである。

「……ふう、ありがと」

まだ少ししみるのか、肩をさする旦那さん。

「どういたしましてだにゃ。じゃあ、ボクはご飯を作ってくるから、だんにゃさんはちょっと待ってるにゃ」

そう言っ僕はテントを出た。

テントから少し離れたところで、ポーチから肉焼きセットを取り出し組み立てる。

「……あ、そういえば、肉は全部毒肉にしたんだっただにゃ」

肉焼きセットが完成したところで、肝心の肉がないことに気が付いた。

「……やってしまったにゃ」

自分の思いついた作戦にうかれて、後のことを何も考えていなかった。

「……今日のご飯、どうしようかにゃ？」

こうして、ボクは途方にくれるのだった。

ちなみに、肉以外に少しだけ持ってきていた、干し芋などの保存食のおかげで、この日は何とかしのぐ事ができた。

まあ、旦那さんには、ボリウムが足りない等、いろいろ文句を言われたのだが……。

「てえい！」

掛け声とともに、ジャギイに向けてユクモノ蛇を振り下ろす。ジャギイは避けるそぶりも見せずに、蛇の直撃を受けて崩れ落ちた。

昨日までと比べ、ジャギイ達の動きがかなり鈍い。私が攻撃する前から、ふらふらと足元もおぼつかない感じだし、巢から応援に出てくるジャギイの数もまばらだ。

どうやら、グンジョーの作戦は中々うまくいったようである。

「この調子だと、グンジョーの方は無駄になっちゃうかも」

昨日と同じく、今日もグンジョーとは別行動だ。

何でも、ドスジャギイなどのモンスターは、毒などに対する免疫力が強く。毒だけでは、精々弱らせる程度の効果しかないらしい。

毒肉でジャギイ達を動けなくして、ドスジャギイとの連携を出来なくする。それが、グンジョーの考えた作戦の第一段階である。

ドスジャギイを確実に仕留めるため、今グンジョーは作戦の第二

段階を実行中という訳である。

私の役割は、また囃役である。

まあでも、ジャギイ達の弱り方が、グンジョーの予想よりもかなり弱っている。昨日は一撃与えるだけで精一杯だったが、毒で弱ったうえにジャギイとの連携も出来ないドスジャギイなら、私一人でも倒せるかもしれない。

「っと、油断大敵！」

茂みから飛び掛ってきたジャギイを、盾で受け流す。そのまま、体勢のくずれたジャギイを切りつけようとすると、私が攻撃する前にジャギイは倒れて動かなくなってしまった。最後の力を振り絞って、私が気を緩ませる瞬間を狙って飛び掛ってきたようだ。弱っていても危険なモンスターに違いはない。

「……よし！」

一度、自分の頬を張って、気持ちを引き締め直す。そうした次の瞬間、滝の向こうに大きな影が現れた。

「ようやくお出ましね……」

左手の武器、ユクモノ鉈の感触を確かめるように握りなおすと、滝を割るようにして現れたドスジャギイを睨みつけた。

ドスジャギイも、すぐに私を見つけたようで、威嚇するように低くうなる。その様子は、何やら怒りに燃えているようで、昨日よりもむしろ力強く見えた。

「くっ……！」

ドスジャギイの、体重をのせた体当たり。ジャギイのそれとは比べ物にならないほどの重い衝撃を、私の盾では受け流しきれずに、少し後ろに吹き飛ばされる。

ガードしたから良かったものの、盾を持つ右手がジンと痺れている。直撃を受けたら、ただじゃすまないだろう。

追撃されるのを警戒して、すぐにドスジャギイの動きに注目する。私に体当たりした後、ドスジャギイは勢いあまって体勢を崩しているようだ。

「てええい！！」

この隙を逃す訳にはいかない。

私はユクモノ鉈を振りかぶり思いきり踏み込むと、体勢を戻そうとするドスジャギイに、鉈を振り下ろした。

皮を裂き、少し肉を切ったところで、何かに引っかかるように止まるユクモノ鉈。恐らくは骨に引っかったのだろう。

一撃でこのサイズのモンスターの骨を断ち切るのは、さすがにこの武器では無理である。

うなるような声をあげて、体を震わせるドスジャギイ。

私は、ドスジャギイの体を蹴るようにして鉈を引き抜くと、横に転がるようにして距離を取った。

鉈が抜けた瞬間、ドスジャギイの傷口からドクドクと血が流れ始めた。

盾を構えて、ドスジャギイの動きを注視する。

突然、向きを変え、走り出すドスジャギイ。

「……え！？」

盾を構えたまま、ポカンと呆ける私。

逃げるように、どんどん遠ざかっていくドスジャギィ。

「え、何？ 逃げた……？」

そういえばグンジョーが、ドスジャギィは深手を負うと、逃げ出して体力回復を図ることがあると言ってたような……。

正直、ご飯の量が足りなくて、あまり聞いてなかったんだよね。

「つて、までこらー！」

ふと我に帰ると、いつの間にか、視界から消えそうな距離まで移動しているドスジャギィ。

私は、全力で走りだし、ドスジャギィを追いかける。

逃げるモンスターに追いつくというのは、やはり難しいようで、中々距離が縮まらない。

今はまだ見えているから良いが、ドスジャギィが逃げていく方には森がある。森に入ってしまったら、見失う可能性がかなり高い。

「くっそ、とまってよー！！」

無駄な事と知りながら、大声で叫ぶ。

もちろん、そんなことでドスジャギィが止まるはずもなく……。まずいなー、なんて思いながら、私はドスジャギィを追うのだった。

あれから、森に入っただけなのに、私はドスジャギイを見失ってしまった。視界が悪く障害物の多い森の中では、さすがに全力で走ることとはできず、振り切られてしまったのだ。

「うーん、こっちに逃げたのは間違いなさそうなんだけども……」

ドスジャギイを見失っただけで、闇雲に森の中を探し回っていた私は、運良く奴の物と思われる血の跡を見つけた事ができた。

今は、逃げたドスジャギイの残した血の跡をたどっている最中である。

「ここで、血の跡がなくなってる」

大きな切り株を中心に、ポツカリと空いた空間。まるで、森の広場のようなその場所で、ドスジャギイの血痕は途絶えていた。

恐らく、血が固まり出血が止まったのだろう。今度こそ、本当に行方が分からなくなってしまった。

「どっしり……」

頬を掻き、これからどうするかを考える。

一つ目の案としては、このままドスジャギイの搜索を続けること。そして二つ目は、いったん搜索を諦めて、グンジョーと合流することだ。

今私に思い浮かぶのは、この二案ぐらいだ。

「このままじゃあどうしようもないし、いったんグンジョーの所に行こうかな」

仮にドスジャギイを見つけれなかったとしても、また逃げられたので

は意味がない。

そんな事を考えて、一人頷いていると――

目の前木陰から、いきなりジャギイが現れて飛び掛ってきた。

「……っつわ!？」

とっさに横に飛んで回避する。

私が武器を構えると同時に、前後左右からゾロゾロと、計六匹のジャギイが現れた。いつの間にか、囲まれていたらしい。

そして、ジャギイに囲まれ動けない私の前に、まるで勝ち誇るようにドスジャギイが現れた。

だらだらと流れていた血が固まり、もう傷口を塞いでいる。モンスター生命力と言う物は、かなり厄介な物のようだ。

「そっちからお出ましとは、探す手間が省けたわよ!」

そう言つて、ドスジャギイをにらめ付ける。正直、これはただの強がりだ。

どうやら、私は誘い込まれたらしい。いきなり逃げ出したのは、怪我の回復を図るのと、毒に侵されていない仲間の所に私をおびき寄せる罠だったようだ。

ジャギイ六匹だけなら何の問題もないが、ドスジャギイがこの場にいるとなると話は別だ。結構まずい状況である。

そんな風に、内心あせりながらドスジャギイ達と対峙していると……。

「……ん? この音は……」

遠くから、高く響く笛の音が聞こえてきた。角笛の音である。

突然聞こえてきた角笛に、ジャギイ達が少し戸惑うようなそぶりをみせる。

「とりゃあー！」

すぐさま、一匹のジャギイに切りかかり、包囲を突破する。

そして、慌てるようにして走り出した。

走りながら振り返ると、私を追いかけてくるドスジャギイ達。

「ひいゝ、来るなー！」

私は、わざとらしく悲鳴をあげると、ドスジャギイが見失わないように走りだす。

うーん、ちょっとわざとらし過ぎたかな……？

「ふう…… やつと完成したのにや」

ジャギイの巣からキャンプへ向かう中間あたりに、かつて人が住んでいたと思われる廃屋が残る、広い平地がある。

その平地の片隅で、今さっき作り上げた物を見ながら、僕はうんうんと頷いていた。

大樽三つと、円盤にスイッチがくつついたような物体。

樽は中に爆薬を詰めた爆弾で、円盤は一定以上の重さを持つ者が踏むと発動する、シビレ罠というトラップである。

日が昇ってすぐに作業を始めたはずなのに、気づけばもう昼である。

シビレ罠の作成にはさほど時間は掛からなかったのだが、大樽爆

弾を作るのにかなりの時間を使ってしまったのだ。

「こんな事なら、樽の方を運んでもらった方が、よかったかも知れないにや」

旦那さんには、材料の運搬を手伝ってもらったのだが、その時は一番重い爆薬を運んでもらい、それ以外を僕が運んだのである。

今思えば、逆の方が良かったかもしれない。なにしろ、大樽という物は僕の体よりも大きいのだ、僕が運ぶためには一度ばらす必要があった。

そして、ばらした大樽を組み立てなおすのに、やたらと時間が掛かったのである。樽の状態のまま、旦那さんに運んでもらった方が早く終わっただろう。

「つと、完成させて終わりじゃなかったにや」

そう言つて、シビレ罨を地面に設置する。そして、その周りに三つ穴を掘り、そこに大樽爆弾を入れた。一目では分からないように、土をかけてカモフラージュする。

「設置も完了だにや、後はだんにやさんと呼ぶだけだにや」

ポーチから角笛を取り出すと、空に向かって思いきり吹き鳴らした。遠くまで響く笛の音。

この角笛がトラップ設置完了の合図なのである。

こうして、定期的に角笛を吹きながら、僕は旦那さんを待つのだった。

「だんにゃさーん、こつちだにゃー!」

しばらくドスジャギイと追いかけて続いていると、森を抜けて平地に出た。

ブンブンと手を振りながら、私を呼ぶグンジョー、どうやら合流地点に到着したらしい。肩越しに後ろを見て、ドスジャギイがちゃんと付いてきていることを確認する。

「よし、ちゃんと付いてきてる」

ボソリとつぶやくと、速度を上げてグンジョーと合流した。ドスジャギイの方に向き直り、ユクモノ鉈を構える。私が急に武器を構えたのを警戒してか、立ち止まりうなるドスジャギイ。

「グンジョー、罠は設置できた?」

「だんにゃさんの足元だにゃ」

グンジョーに尋ねると、彼は自分の武器で私の目の前の地面を軽く叩いた。一目では分からないが、良く見ると、確かに何か埋まっている。

「一定以上の重量を持つモンスターが踏むと放電して、少しの間モンスターを痺れさせて拘束するのにゃ」

武器を構えながら、罠の説明をするグンジョー。

「奴が罠を踏んだら、こいつで周りに埋まっている爆弾を起爆させるのにゃ」

そう言つて、グンジョーはポーチから小さな樽を取り出した。小樽爆弾と言われる物で、導火線に火を着けると、一定時間後に爆発するのだ。主に、大樽爆弾の起爆などに使われている。

「じゃあ、あとはコイツに罠を踏ませるだけね」

さっきから低くうなるだけで、全然動かないドスジャギイ。やはり警戒しているのだろうか。

「グンジョー……逃げるよ」

「にやにや、逃げるのかにや!？」

「いいから……」

そう言つて、じりじりと武器を構えたまま後退する。

そして、ある程度ドスジャギイと距離が離れたところで、クルリと向きを変え走り出した。後ろを見ると、つられるように追つてくるドスジャギイ。

警戒しているのなら、自分の方が有利であると思わせれば良いのだ。今回のクエストで、このドスジャギイから学んだ事である。

小さな爆発音とともに、ドスジャギイの搾り出したような鳴き声が聞こえた。

「おお、やったにや!!!」

罠に掛かったドスジャギイを見て喜びの声をあげると、すぐに駆け出すグンジョー。痺れて動けないドスジャギイの足元に、着火した小樽爆弾を置き、すぐにその場から離れる。

小さな爆発が起こり――

そして、大型モンスターの咆哮を思わせるような、爆音が轟いた。

「……凄い爆風」

思わず盾でガードしたが、もう少し近くだったら無傷ではすまなかったかもしれない。

「お、おふう……」

横を見ると、グンジョーが倒れていた。何か、上手く起き上がれないようだ。

腰でも抜けたのだろうか？

「ちょっと、大丈夫？」

「こ、腰が抜けたにや……」

どうやら、本当に腰が抜けていたようだ。

アイルーでも、腰が抜けることはあるらしい。

「ほら、引つ張るよ」

そうして、グンジョーを起こそうとしたときだ……。

突然、後ろから何か大きな物に当り、その衝撃で吹き飛ばされた。

「うわっ!？」

「だんにゃさん!？」

受身も取れずに、地面を転がる。

「くっ……」

痛みをこらえて起き上がると、息も絶え絶えといった様子のドスジャギイが私を睨んでいた。あの爆発を受けても、まだ生きていたらしい。

死んだと思い込み、ちゃんと確認するのを怠ったせいで、キツイのを一発貰ってしまった。

モンスターの生命力は、本当に厄介である。体はぼろぼろ、口からはよだれを垂れ流し、足を引きずって私に向かってくる。

「…まったく、さつさと…くたばり、なさいよ！」

痛みで荒くなった呼吸のまま、ドスジャギイに向けて走り出す。そして、ユクモノ鉈を振り上げると――

「ぜいやああああー!!」

最後の一撃を、振り下ろしたのだった。

こうして、私とグンジョーの、初の討伐クエストは幕を閉じたのであった。

三話・緊急のクエスト 下（後書き）

次からようやくクエスト開始。

とりあえず投稿。

四話・ユキとゲンジョーの日々（前書き）

四話、開始。

四話・ユキとグンジョーの日々

「はい、オーケーよ」

そう言うのと、私の体に巻かれていたばかりを女性が回収していく。クエストから帰ってきた翌日、私は加工屋にやって来ていた。加工屋とは、鉱石やモンスターの皮などを加工して、武器防具や日用品などに作り変えてくれるお店である。

私が加工屋へやってきた理由は、もちろん武器の強化と防具を新調するためである。

今、ちょうどサイズを測り終えたところだ。

「じゃあ、これで……」

私は、ポーチから素材を取り出すと、武器と共に、加工屋の主人である背丈の低い竜人族のお爺さんに手渡した。この道数十年のベテランで、小さい体のどこにそんな力があるのか、身の丈ほどの大きなハンマーを軽々と持っている。

ちなみに私の身体のサイズを測った女性は、加工屋のお手伝いで、普段はお爺さんの作った武器や防具を売っている。

「あう！ 明後日には仕上げとくけえ、その時にまた顔出しとくんな」

「はい、お願いします」

お礼を言うと、私は加工屋を後にした。

「いらつしゃいユキさん、回復薬とか仕入れてみたわよ。村にハンターが常駐するなんて始めてだから、まだ品揃えは少ないけど、必要な物は揃えたつもりよ。よければ買っていつてね」

次に私が訪れたのは、加工屋の対面にある雑貨屋である。商売しているのは、私と同年代くらいの女の子だ。

日用品と食料品の間に、回復薬などの狩猟に役立つ物が並んでいる。

「うーん、そーねえ……」

回復薬とかのストックつてどれぐらいあったっけ……？

そういう物の管理は、全部グンジョーがやってくれているから、ちよつとよく分からない。

まあ、クエストで使った分だけ買っておけばいいだろう。

「じゃあ、回復薬二つと薬草一つ、あと砥石三つください」

「まいどー」

料金を払い、品物を受け取る。そうして、別の場所に行こうとすると、雑貨屋の女の子に話しかけられた。

「あ、そういえばさ……さっきあなたのところのアイルー君が、何かニヤニヤしながら分厚い本を抱えて、農場の方に行ってたわよ」

「グンジョーが？」

何か嬉しいことでもあったのだろうか？

「ありがと、ちょっと農場にいつてみるよ」

雑貨屋の女の子に礼を言つと、私は農場へ行く事にした。

「ふふふ……ついに、ついに手に入れたのにや」

ずっしりとしたこの重厚感、手にフィットするなめらかな革の感触。そして、質素ながらも高級感を感じさせる外觀。

『調合新書』

僕はついに、念願の本を手に入れたのである。

万が一落としても良いように、地面にシートを敷き、その上に腰を下ろす。そして、抱え込むように持ったその本を開いたのであった。

この本はハンターギルドが管理していて、一般にはまったく販売されていないのだ。そのため、入手するにはハンターとしてギルドに登録するのが一番簡単な方法である。

調査をするようになってから、ずっと欲しいと思っていたのだ。

実は、オトモアイルーを目指した最大の理由は、この本が手に入るからだったりする。

一ページ、また一ページと本のページを送る。

「……………」

パラパラとページをめくる。

「……………」

パラパラパラとページを読み飛ばす。

「……………」

パラパラパラパラパラ、パタン。

「…………ふう」

僕は調合新書を閉じると、そのまま地面に投げ捨てた。

「まったく、とんだ期待はずれだったのにや……………」

僕が知らない調合が載っているかと思って、期待していたのだが……………。

回復薬や解毒薬など、初歩的なものしか載っていないのである。

「ハア…………だんにゃさんに貰った、せつかくのお金を無駄にしてしまったのにや」

ため息をついて、ゴロンと寝転がる。いわゆる、ふて寝である。そうして、僕が夢の世界へ旅立とうとした時、不意に声が掛けられた。

「どうしたの、グンジョー？」

「んにゃ？」

目蓋を開けると、いつの間になつてきたのか、旦那さんが上から覗くようにして僕を見ていた。

「ああ、だんにゃさん。ボクに用事かにゃ？」

体を起こし、旦那さんに尋ねる。

「いや、さっき雑貨屋の子から、何かグンジョーが嬉しそうに歩いていったって聞いたからさ、何してるのかなーって思つて」

「ああ、それは念願の本を手に入れて、舞い上がっていた時だにゃ」

そう言つて、地面に投げ捨てた本を指した。

「これって何の本？ 念願の本って割には、何か雑に扱つてるけど……」

旦那さんが、本を手に取り、汚れを払うように表紙を叩いた。

「調合の本だにゃ、でもボクの期待していた内容は載ってなかったのにゃ」

「ふーん、難しい内容なの？」

パラパラと流すようにページをめくる旦那さん。適当に眺めているだけで、読んでいる訳ではないようだ。

「いや、だんにゃさんに丁度良いくらいの内容だにゃ。……だんにゃさんにあげるから、この本でだんにゃさんもちよつとは勉強するにゃ」

「……あー、うん、ありがとう」

何か微妙な顔をする旦那さん。

まあ、調査の基本が載っていたから、旦那さんのような調査初心者には丁度良いだろう。

「……ん？」

そこで、ふと思い出したある。

そういえば、なりたてのハンターが買える調査書って、初心者用だけじゃなかったか？

「だ、だんにゃさん！　ちょ、ちょっとその本見せてくれにゃいかにゃー！」

「え、いいけど……」

そうして、旦那さんから本を受け取ると、タイトルを確認した。

『調査新書』

そう書かれたタイトルの横、そこには小さな文字で入門編と書かれていた。

「……もっと、良く見ればよかったにゃ」

そうして、僕はガツクリとうなだれるのであった。

「あー、ほうほう、へー」

読み終えた頁をめくり、次の頁をひらく。

あのあと家に帰った私は、特にする事もないということで、グンジョーから貰った調査新書という本を開いたのである。

調査の基本論理や初心者向けの調査レシピが、ほぼ素人である私でも理解できるように書かれている。本来、本を読むのが苦手な私でも、飽きずに読み進められた。

私に丁度良いとグンジョーが言っていたが、どうやら本当だったようである。

今まで毛嫌いしていたが、勉強してみると意外と面白い。

グンジョーがやっているような調査は、難しすぎて意味不明だが、この位の簡単な調査なら自分で出来るようになっておいた方が良さだろう。

「今度、グンジョーと一緒に何か調査してみるのも良いかもね」

まあ、その時は私にも出来るレベルの調査をする事になるだろうけど。

そんな事を考えていると……。

「だんにゃさん、ただいま帰ったにゃー」

と、丁度グンジョーが帰ってきた。

「お帰りー」

机に向かったまま、左手を上げて振る。

「おお、さつそく勉強とは、さすがはだんにゃさんだにゃ」

机によじ登り、私が本を読んでいるのを見て、ウンウンと頷くグンジョー。

「今まで毛嫌いしてたけど、調合って、結構面白いんだね」

「オオー！ ついにだんにゃさんも調合の魅力に気がついたのかにゃ？」

私の言葉に、キラキラと目を輝かせるグンジョー。グンジョーは調合が趣味のようだから、私が少しでも調合に興味を持った事が嬉しいのかもしれない。

いつも一人で調合してるみたいだし、さびしかったのかな？

「まあ、でもあれだよ、いつもグンジョーがやってるような難しそうなのは、まだ分かんないよ」

「いいにゃいいにゃ、だんにゃさんが調合に興味をもってくれたことが嬉しいのだにゃ」

そう言って、机の上でクルクルと踊るように回るグンジョー。

「うにゃ、にゃにゃあー!？」

机の上だという事を忘れていたのか、端で足を踏み外し、ボテッと落ちた。

「ふふっ……もう、何やってるのよ」

床でもだえるグンジョーを見て、自然と笑みがこぼれるのであった。

言われたとおりの翌々日、頼んでいた物を受け取るため、私は加工屋へとやってきた。

どうも奥で作業をしているようで、加工屋のお爺さんもお手伝いのお姉さんも私に気づいていないようである。

「今日はー」

ちゃんと聞こえるように、大きめの声で挨拶した。

「あああう！ よう来たなう。頼まれとったもんは、ほれえ、ちゃあんとできとるでえ」

そうして、私は加工屋のお爺さんに、片手剣と盾を渡された。

ユクモノ鉈を鉄とドスジャギイの素材で強化した、私の新たな武器『ハイドラナイフ』である。

盾を腕に装備し、ハイドラナイフを握る。そして、何も無い空間に向かって、ブンブンと素振りをした。

「うん、結構良い感じ」

武器の重量はユクモノ鉈よりもやや重めだが、全体のバランスが良く振りやすい。滑り止めに巻かれたジャギイの皮も、中々良い感触である。

「素振りなら、これを着てからやった方が良いんじゃない？」

私が一人うなずいていると、加工屋の方から声がかけられた。見ると、お手伝いのお姉さんが、大荷物を持って私を手招きしている。あれは、恐らく加工を頼んでいた、もう一つの物だろう。

「あ、はい、それもそうですね」

お姉さんに駆け寄ると、荷物を受け取った。ジャギイシリーズと呼ばれる、ジャギイの素材で作られた防具で、ずっしりと中々の重量である。

「着替えるなら、奥で着替えるといいわ」

加工屋の奥を指差すお姉さん。

「分かりました、ありがとうございます」

そうして、軽く頭を下げると、加工屋の奥へ向かうのだった。

「や！ はあ！ てい！」

受け取った装備を着て、再度素振りをする。感想としては、今までのユクモノシリーズと比べると、少し動きにくいと言うところだろうか。

まあ、防御力は断然ジャギイシリーズの方が高いし、動きにくいと言っても、本当に少しだけなので問題ないだろう。

「あああう！ 問題はないようだのう」

私の動きを見て、加工屋のお爺さんが言う。

「はい、ありがとうございます。じゃあ、着替えてきますね」

そうして、私は再び加工屋の奥へ向かったのだった。

「ブニヤウ、そこのおぬし、しばし待つでござる」

「はい？」

着替えを終えて、家に帰ろうとしたときである。荷物を抱える私に、妙な声がかけられた。

振り向くと、鎧と兜を着けた、年老いたアイルーがいた。

「忘れ物でござる」

そう言うと、年老いたアイルーは、ジャギイの素材で作られた、ナイフと小さい防具のようなものを差し出した。

「これは？」

「おぬしが作った装備の、素材の余りで作ったオトモ武具でござる」

そういえば、グンジョーの装備について考えてなかったと、今更気づいた。

「もらって良いの？」

「うむ、本来ならお金を貰うのだが、初回サービスでただでござるよ」

私は、差し出されたオトモ武具を受け取った。

運が良い、グンジョーのことを忘れて、自分だけ装備を新調してしまうところだった。

「これより先、オトモ武具が必要になった時は、この『もみじい』に言うがよいでござる」

次装備を変えるときは、グンジョーのことも忘れないようにしないとな……。

こうして、私は自分の装備と、グンジョーの装備を抱えて、家に帰ったのであった。

「だ、だんにやさん……これはまさか！」

ちょうど昼を過ぎたころの事である。僕が、日課である農場での作業を終えて家に帰ると、突然旦那さんにジャギイの皮で作られた物を渡されたのである。

ちよつと洒落た感じの帽子と皮を重ね合わせて作られた鎧、それと扱いやすそうな小型の剣。ジャギイの素材で、紫に統一されたそれらはとても鮮やかで綺麗である。

「ボクの新しいオトモ装備かじゃ！？」

「うん、そうだよ。……私の装備を新しくしたときの、余った素材で作ってもらったの」

そう言つて、旦那さんは部屋の隅に置いてある、自分の装備を指差した。一般にジャギシリーズと呼ばれる装備である。

「まさか、こんなにサプライズを用意してくれているとは……さすがは、だんにゃさんだにゃ！」

簡単には言い表す事ができないほど、今僕は感動している。

「ボク、だんにゃさんのオトモで良かったのにゃ……」

「そ、そう、気に入ってくれたみたいで……私も良かったよ」

何か、微妙に視線をそらす旦那さん。
きつと、照れているのだろぅ。

「さっそく着てみるのにゃ！」

そう言つて、僕は着替えるのであつた。

「うーん、これはかなり良い感じだにゃ。丈夫で軽いし、何より動きやすさが前の装備とは段違いだにゃ！」

防具を装備してみた率直な感想である。

以前はどنگりネコメイルという、どنگりのような形をした木

製の防具を装備していたのだが、硬くてちょっと動きにくかったのだ。

その点、このジャギネコメイルは柔軟性があり、とても動きやすい。

「この剣も、前の武器より投げやすそうだな」

僕は、主に武器をブーメランのように投げて戦うのだが、武器全体のバランスが以前の武器より安定していて、命中率も良さそうである。

今まで装備していた肉球ネコぱんちは投げるには不向きな武器だったため、ろくなダメージを与えることが出来なかったが、このジャギネコナイフなら少しはまともな傷を与える事ができそうだ。

「にやふふふふ、この武器さえあれば、今度こそボク一人でヤツを倒せるかも知れないのにや……」

ニヤニヤと、その瞬間を妄想する。ちなみに、ヤツとはジャギネコのことだ。

ジャギネコを一人で倒す。

それが、今の目標の一つである。

四話・ユキとゲンジョーの日々（後書き）

村人の名前が思い浮かばない。その内、思いついたら修正するかも……。

とりあえず投稿。

五話・森の異変（前編） 上

それは、私とグンジョーがドスジャギイを討伐してから、ちょうど一ヶ月が過ぎた日のことである。

ここユクモ村は、温泉で有名な村である。

一日の終わりに温泉に入ろうと、私は集会浴場へ向かったのだ。すると、その途中で村長さんと数人の村人が集まって、何やら話しているのを見かけたのである。

何か問題でも起きたのか、皆真剣なようすで話しこんでいて、誰も私に気がついていないようだ。

「どうかしたんですか？」

さすがにこのまま無視して温泉に行くなんてできないので、近寄って村長さんに話しかけた。

「あら、今晚はハンターさま。ちょうど良いところにきて下さいました」

「あ、今晚は。何かあったんですか？」

律儀に挨拶されたので、私も挨拶し返す。

「ハンターさまは、アオアシラというモンスターをご存知かしら？」

「アオアシラって、確かここら辺に生息するモンスターですよね」

山や森に生息する牙獣種のモンスターで、鋭い爪と厚い甲殻を持

つ前足は非常に発達しており、その一撃には注意が必要。あと、美しい青毛を持つことから『青熊獣』とも呼ばれる。

確か、この前読んだ書物には、そんな感じに書かれていたはずだ。グンジョーに進められて、調査以外の勉強も始めたのだが、結構役に立つことが多い。

「ええ、アオアシラは、この村ではなじみ深いモンスターなのですが、最近村の近くに現れる事が多くなって困っておりますの。本来ならアオアシラが山からおりてくるのは、もう二月くらい先のはずなのですが……」

どうやら、この次期にアオアシラが現れるのは珍しい事のようなのだ。村長さんや村人達は、皆少し困惑した表情を浮かべている。

「んー、と言う事は、アオアシラの討伐依頼ですか？」

そうになると、久しぶりの討伐クエストだ。この一ヶ月の間に私がこなしたクエストは、採集系の依頼が四つだけで、特にモンスターと戦うような事もなかった。

「はい、そうですわ。あと、こちらは出来れば良いんですけど、アオアシラがこの時期に山をおりてきた理由の調査もお願いいたします」

アオアシラの討伐と、原因の調査か……。
気を引き締めて掛からないと。

「はい、分かりました！」

自らに気合を入れるように、大きな声で依頼を承諾した。

さっそく、クエストの準備をしなければ！

こうして、私の二回目の討伐クエストが始まったのである。

「アオアシラの討伐と、周辺の調査かにゃ」

「そう、一ヶ月ぶりの討伐クエスト」

温泉に向かったはずの旦那さん。やけに帰ってくるのが早いなと思ったら、道中で依頼を受けてきたようである。

最近は採取系のクエストばかりだったからか、何か妙に気合が入っているように見える。

「それで、クエストにはいつ出発するのにな？」

旦那さんが温泉に入らずに戻ってきたことを考えると、かなり緊急の依頼なのかもしれない。

「今回のクエストは討伐と調査で、準備期間が要るだろうから、三日後に出発の予定だよ」

ドスジャギイの時は、その日の内に準備して翌朝に出発だったので、どうやらそこまで緊急というわけではなさそうだ。

「……だんにゃさん、それなら温泉に入ってきてても良かったんじゃないの？」

僕は首をかしげて、旦那さんに尋ねた。

まあ、きつと久しぶりの討伐クエストで、頭がいつぱいになってしまったのだろう。

「あ……」

ポカンと口を開けて、フリーズする旦那さん。

思ったとおり、忘れていたようだ。

「まあ、急ぐ必要もないのだし、もう一度行けばいいんじゃないかじゃ？」

「あー、私何やってんだろ……。はあ、しょうがない、もう一度行ってくるよ」

そう言つと、ちょっとしょんぼりしながら温泉へ向かっていく旦那さん。

「あー、だんにゃさん。だんにゃさんが温泉に入っている間に、美味しいご飯を作っておくから元気出すにゃ」

いや、まあさすがにこんな言葉で元気付けられるとは思ってないけど、他に思いつかないのだからしょうがないじゃないか……。

「グンジョー、今日はお肉をがつつり食べたい気分かな」

……どうやら、元気付ける事に成功したようである。

立ち止まり、右手でグーサイン（手の親指だけ立てるアレ）を僕に見せる旦那さん。

「了解だにゃ！」

何となく、その場のノリで敬礼のようなポーズをとる。

そして、そのまま旦那さんを見送ると、僕は料理に取り掛かるのだった。

「じゃあ、私テントを張るから、グンジョーは運べるものを運んできて」

「了解だにゃ！」

三日後の昼、しっかりと準備を済ませた僕と旦那さんは、予定通り溪流へやってきていた。

今は、あまりモンスターが寄り付かない、岩山の中腹に作られた空間でキャンプの準備をしているところである。

「まずは、これから運ぶのにゃ」

そうつぶやくと、竜車で運んだあと無造作に置かれた荷物の山から、食料品の入った樽の一つを持ち上げた。

旦那さんがテントを張り、その間に僕が荷物を運ぶ。

僕の体格ではテント張りなどの作業は出来ないため、何度かクエストをこなす内に、いつの間にかこういう役割分担ができていた。

いや、まあ役割分担とかちょっと格好つけたけど、単に僕にできることがそれしかないから、自然とこんな形になったって感じなんだけど……。

「グンジョー、それ食べ物？」

僕が樽を持って行くと、テントの骨組みを組みながら、旦那さんが尋ねてきた。

「ホシイモとかの保存の利く食べ物だけど、どうかしたのかにゃ？」

樽の中身を教えて、首をかしげる。

「んー、とりあえずここに置いて」

そう言つて、旦那さんは自分の近くの地面を指差した。
今までと比べ、今回は荷物の量が多いから、置く場所をあらかじめ決めておくとかそういう事かもしれない。

「分かったにゃ、食料は全部こちら辺に置けばいいのかにゃ？」

言われたとおりの場所に樽を置き、旦那さんに次に持ってくる荷物の置き場所を尋ねた。

「うーん、次からはあっちの壁際に置いて」

少し考えるようにして、反り返る岩壁を指差す旦那さん。

「んにゃ？ あっちに置くのにゃ？」

旦那さんが指差した岩壁を見て、首をかしげる僕。

「うん、他の荷物もあの辺にまとめて置いてね」

何で最初の荷物だけココに置くのか、ますます訳がわからないが……。

まあ、きっと旦那さんには何か考えがあるのだろう。

「じゃあ、次の荷物を持ってくるにや」

そう言って、僕は次の荷物を取りに戻ったのであった。

「……だんにゃさん、一応聞くけど、何をしているのにや？」

いや、まあね。旦那さんに食べ物ときて、その可能性を考えなかった僕が悪いのかも知れないけどね……。

「いや、ちょっとおなかすいちゃってさ……」

テヘへと笑う旦那さん。

僕が次の荷物を持つてくると、旦那さんが作業を中断してホシイモを食べていたのである。

「はあ……。まあ、だんにゃさんだし、しょうがにゃいか……」

今日の朝ご飯は大目に作ったはずなんだけど、どうやら足りなかったみたいである。

「む、何よそのため息は」

ちよっとムスツとした表情になる旦那さん。

「にやはは、ゴメンにゃだんにゃさん。作業が終わったら、すぐお昼にするつもりだから、ちょっと我慢してほしいのにゃ」

「うー、まあそれなら……」

作業に戻る旦那さん。

うん、昼ご飯はたくさん作ってあげよう。

そう決めて、僕も荷物の運搬に戻るのだった。

作業を終え食事をとった後、僕と旦那さんはさっそく狩場へ繰り出した。

「アオアシラはハチミツが好物で、あとは河原で魚を捕ったりするにゃ」

「ハチミツに魚ってことは、森とか川のある辺りね」

旦那さんが、今までのクエストで回った場所を思い出すようにし言う。さすがに、もう溪流の地形は頭に入っているようだ。

「あと、山の御神木にも大きな蜂の巣があつたはずだにゃ」

旦那さんは分かっているだろうけど、一応補足しておく。

「じゃあ、今日はそのどれか一つに行ってみようか」

「そうだにゃ、そつするにゃ」

旦那さんの言葉にうなづく。

今回のクエスト期間は、最大十五日といつかかなり長いものだし、そう焦って探す必要もない。

「じゃあ、一番近い森に行ってみよう」

と言うことで、僕と旦那さんは森の方へ向かう事にした。

「うーむ、どうやら当たりみたいだにゃ」

食い散らされた、蜂の巣の残骸を一欠片だけ手に取りつぶやく。

僕と旦那さんが森の搜索を始めてからしばらく、ようやくアオアシラの残した痕跡を発見することができた。

「グンジョー、何か見つけたの？」

僕が蜂の巣の欠片をいじっていると、近くを搜索していた旦那さんがやってきた。

手ぶらなところを見ると、旦那さんの方には何もなかったようだ。

「食われた蜂の巣を見つけたのにゃ、たぶんアオアシラの食べ残しだにゃ」

僕は、手に持った蜂の巣の欠片を旦那さんに差し出した。

欠片を受け取り、手で回すようにして見る旦那さん。

「…………あ！」

旦那さんが、急に何かに気づいたように声をあげた。

「どうしたにや！？」

「ちょっとハチミツついてる、ラッキー」

そう言つと、旦那さんは蜂の巣の欠片を口に放り込んだ。

「うん、甘くておいしい」

頬に手をあて、何か幸せそうに顔を緩める旦那さん。

「……………」

「…………どうしたのぐんじょー？　もしかして、ゲンジョーも食べたかった？」

まったく、旦那さんは何でこうマイペースなんだろうか……。

「だんにやさん、やっぱりにゃんか溪流のようすがおかしいにや」

あれから、たいした収穫もなく、キャンプに戻った私達。

私が武器のチェックをしていると、夕食の用意をしながら、ゲンジョーが話しかけてきた。

「おかしいって、どんな？」

特に問題も見当たらなかったので、武器のチェックを終えてグンジョーの方を向く。

「モンスターと全然出会わなかったのにや」

肉焼き機にセットした肉をリズムよく回しながら、グンジョーが言う。

「あー、確かにそうかも……」

満遍なく焼けていく肉の動きを目で追いながら、答える。相変わらずグンジョーの焼く肉はおいしそうである。

言われてみれば、今日はほとんど武器を使った覚えがない。邪魔な背の高い草を刈るのに、二三回使っただけだ。

「ちょっと前に来た時は、ちゃんとモンスターを見かけたのにやあ……と、だんにやさん、一本焼けたにや」

そう言って、肉焼きセットからこんがり肉を取り外し、私に差し出すグンジョー。

「ありがと。まあ、でも今日行ったのは森の方だけだし、他の場所にも行ってみないと何とも言えないんじゃない？」

お礼を言って、グンジョーからこんがり肉を受け取る。

「こういう場合に考えられるのは、凄くヤバイのが近くに居て、そ

れでモンスター達が逃げ出したっていう可能性かにゃ……」

グンジョーが、新しい肉を肉焼きセットに取り付けながら言う。
「凄くヤバイモンスターねえ……」。

「ほれって、どんなもんふたあよ」

「だんにゃさん、食べながら喋るのはよくないにゃ」

「んぐ……それって、どんなモンスターよ」

食べながら話すのをグンジョーに注意されたので、飲み込んでからもう一度話す。

「うーんと、古龍種とかにゃ？」

「古龍って、さすがにそれはないでしょ。ここら辺で古龍が確認されたのって、ずっと昔のことじゃない」

古龍種とは、どの種類にも分類できない特殊なモンスターの総称である。その生態は謎に包まれていて、出会うことすら稀であり討伐されたという報告もほとんどない。分かっていることは、古龍はそのどれもがとてつもなく強大な力を持っているということだけだ。

「うーん、違う地方では時々観測されるらしいけど、ここら辺ではそう言う話は聞かないし……大丈夫かにゃ」

「まあ、注意だけはしていきましょう」

こうして、初日の夜は更けていった。

五話・森の異変（前編） 上（後書き）

五話開始。

とりあえず投稿。

五話・森の異変（前編） 中

「……………」

現在、クエスト四日目の夜。私の体感だと、そろそろ日付が変わるころだろうか。

川付近の茂みに身を伏せ、私はじっと辺りのようすをうかがっていた。

二日目も三日目も、初日と同じように探索したのだが、アオアシラの姿を確認することはできなかった。

前日に有った蜂の巣が食べられていたり、アオアシラがこの溪流に居るといふ痕跡はあるのだが、どうも行動のタイミングが合わないようである。

このままでは期限切れでクエスト失敗という可能性も考えられたため、四日目はアオアシラの痕跡があったところで待つてみることにしたのである。

アオアシラの残したものと思われる痕跡は、最初ににらんだ通り森と川と山中の御神木の三箇所で見つけた。そのうち、川を私が見張り、グンジョーには山中の御神木を見張ってもらっている。

「……………そういえば、すぐに合図を送れるように一応用意しとかないと」

そうつぶやくと、私はポーチから小樽を取り出し、使用方法を確認する。

この小樽は、打ち上げ樽爆弾という少し特殊な樽爆弾で、導火線に火をつけると打ちあがり一定距離飛んだところで爆発するのだと

いう。

アオアシラを見つけたとき、すぐに合図を送れるようにとグンジョーに渡されたのである。

グンジョーから、使用法とその際の注意点は聞いているが、私は樽爆弾と言う物を使うのが初めてなので、ちよつと不安だったりする。

下手な使い方をすると、その場で爆発してしまうこともあるらしい。

「……………」

ドスジャギイのとき、グンジョーの使った爆弾の威力を思い出す。さすがに、この小さな樽に詰められた火薬であのような大爆発は起こらないだろうけど、至近距離で爆発したらただじゃ済まないだろう。

「使う時は、慎重に使おう……………」

そうして、私が樽爆弾の使用法を再確認していたときである。遠くから、火薬が爆発する音が聞こえてきた。

「これは……………合図!？」

咄嗟に音の聞こえて来た方向に振り向く、音が聞こえてきたのはグンジョーの見張る山の方からだ。

再度同じ方向から破裂音が聞こえた。どうやら、グンジョーがアオアシラを発見したらしい。

「急がなきゃ!」

グンジョーは戦うのが苦手だから、急いで合流しないと危ない。私は使用法を間違えないように、打ち上げ樽爆弾を起動した。飛び上がった樽爆弾がちゃんと爆発するのを確認すると、私はグンジョーの方へ急ぐのだった。

「さーて、これからどうしのぐかが問題だにや……」

搜索の時間と方法を変更したことが効をそうしたのか、比較的早くアオアシラを発見することができた。

合図の樽爆弾は打ち上げたし、旦那さんが打ち上げた返答も確認した。

あとは旦那さんを待つだけなのだが……。

「まあ、まだとりあえず様子を見ているだけみたいだから、なんとなかなるか……にや？」

合図の樽爆弾を打ち上げた時点で、アオアシラは僕に気が付いたみたいなのだが、地面に座り興味深そうにこちらを見ているだけで攻撃してくるような気配はない。

アオアシラからしてみれば、僕は『何か変な事をしている小さいの』みたいな感じで、敵として見られてないのかもしれない。

「しばらくは、このまま何もしてこないとありがたいのだけどにや……」

何せここから川までだいぶ距離がある、旦那さんが駆けつけてくれるまでしばらく時間がかかるだろう。

加えて今は夜である、僕は夜目が利くので何ともないが、旦那さんはそうもいかない。緊急事態ならともかく、さすがに旦那さんでも、暗い森の中を走るなんてことはしないだろう。

僕がそんなことを考えていると、地面に座ってこちらを見ているだけだったアオアシラが、突然動き出した。

一歩ずつ、ゆっくりと僕に近づいてくるアオアシラ。

「め、目を合わせて、ゆっくりと後ろに下がるのにや……」

僕は突然動き出したアオアシラに焦り、気がつくとも以前どこかで聞いた対処法を実践していた。

曰く、熊は背を向けて逃げる者を追う習性があり、熊と出会った場合は向き合ったまま刺激しないようにゆっくりと後退するのが最善なのだとか……。

「って、これは熊に出会ったときの対処法だにや!」

焦るあまり、大声で自分自身につっこむ僕。

これが、僕の今日最大の失敗だった。

「やっちゃったのにや……」

後ろ足二本で立ち上がり、前足を大きく広げてうなり声をあげるアオアシラ。

今の大声で、僕を敵とみたらしい。

二三度威嚇するように吠えたあと、跳ねて飛び掛ってきた。

「うにゃあ!？」

驚いて転がり、運よく回避に成功した。

アオアシラの攻撃は、僕の代わりに後ろにあった木に命中した。
ミシリと嫌な音を立て折れ曲がる木。

運良く、咄嗟に回避できたから良かったものの、あんなものをまともに受けたらただじゃ済まない。

こうして、だらだらと冷や汗をながしながら、僕は一刻も早く旦那さんが来るのを祈るのだった。

私が山中の御神木にたどり着いたとき、その場にはグンジョーもアオアシラも居なかった。

「グンジョー、どこにいるのー！」

グンジョーの毛並みは青だし、装備も暗い中で目立つような物ではない。

どこかに隠れているのではと、大声でグンジョーを呼ぶ。

「……………」

いくら耳を澄ましても、風に草木が揺れる音しか聞こえてこない。

「グンジョー！！」

もう一度、大声でグンジョーを呼んでみるが、やはり返事はない。
何もしていないのに、少し呼吸が荒くなる。

「どこにいるのー!!」

まるで叫ぶように大声でグンジョーを呼びながら、私は辺りを探索した。

御神木の裏、岩陰、倒木の陰、茂みの中……グンジョーの隠れられそうなところを一箇所ずつ探していくが、そのどこにもグンジョーはいなかった。

「ハア…ハア…ハア……」

木に登り、岩陰木陰を覗き、茂みをかき分ける……モンスターとの戦闘に比べたら、ほぼ無いと言ってもいい運動量。

たったそれだけの運動なのに、何故か私は妙に体力を消耗していた。

「こういう時こそ、落ち着かないと……」

このままでは、何かする前に参ってしまう。

私は大きく深呼吸をして、自分を落ち着かせようと試みる。

「ふう、少しは落ち着けた……かな？」

夜の冷たい空気を胸いっぱい吸い込んだお蔭か、呼吸と鼓動が少しだけ正常に戻ったように思う。

「冷静に考えてみよう」

まずグンジョーは、ここでアオアシラを発見したはずだ。場所は何度も確認したので間違いはないし、ちゃんと合図もあった。

そして、先ほど辺りを探索したときに、モンスターの物と思われ

る爪あとが倒木などに残されているのを見つけた。

恐らく、グンジョーは合図を打ち上げたあと、アオアシラに襲われたのではないだろうか？

それで、アオアシラから逃げるために場所を移動した。

「……でもその場合、グンジョーなら私に何か目印みたいなものを残してから逃げそうだね……」

一通り見た感じだと、そのような物は見当たらなかった。防具の切れ端とか、アオアシラにやられたという形跡も見当たらない。

考えことは苦手である、全然状況が推測できない。

「うーん、自分から逃げたのではなくて、結果的に逃げたというか移動してしまった……とか？」

適当に思いつきを言ってみる。

「……もしかしたら」

つぶやいて、私は崖になっている場所へと移動した。

適当に言ってみただけだったのだが、当たりだったようだ。崖に向かつて滑ったような跡がある。

崖の下を覗き込むが、高すぎて下に何があるかは見えなかった。

恐らく、グンジョーはこの崖から落ちてしまったのだろう。

「急がなきゃ！」

まさか、ここから飛び降りるなんてできない。

私は、崖の下へと下るため、来た道を引き返すのであった。

「……アオアシラめ、絶対狩ってやるにや」

河原の側に座り込み、ぼーとしながらつぶやいた。

あの後、アオアシラとの戦闘に入った僕は、崖から突き落とされてしまったのである。

「しつかし……あんによところから落ちたのに、よく無事に済んだものだにや」

そう言って、山頂付近の僕が落ちた辺りを見上げる。

何でも、猫はかなりの高所から落下しても平気だとか、以前どこかで聞いた覚えがある。

まあ、アイルーも猫みたいなものだし。

恐らく、アイルーの身体にも同じような機能が備わっていて、僕は知らない内にその機能を使っていたのだろう。

「グンジョー!!」

僕がうんうんと一人頷いていると、山の斜面を旦那さんが降りてくるのが見えた。「おー、だんにやさーん!」

旦那さんに分かるよう、ブンブンと手を振り大声で呼ぶ。

「ハア、ハア、ハア……。良かった、グンジョー、無事だった」

よほど急いで来たようで、旦那さんは息を切らしている。

「ごめんにゃ、だんにゃさん。せつかく見つけたのに、アオアシラを見失っちゃったにゃ……」

頭を下げ、旦那さんに謝る。

僕がもう少しまともに戦えたのなら、こんな事にはならなかったのだ。狩りの手助けをするのがオトモアイルーの役目なのに、僕は旦那さんの足を引っ張ってしまった。

「グンジョー、何で謝るのよ？」

僕と目線の高さにあわせるように、しゃがんで旦那さんが問いかけてきた。

「え、だって、ボクが不甲斐にゃいせいで、一日無駄にしてみましたから……」

もうすぐ夜が明ける。

あのアオアシラが活動しているのは、恐らく夜だけだ。ねぐらが何処にあるかも特定できてない、また明日の夜に出直しである。

「そんなこと、別に謝る必要ないわよ。グンジョーは十分約にたってるし、また明日頑張る？」

そう言って、僕の手を引くようにして立ち上がる旦那さん。

「にゃあ……」

旦那さんに手を引かれて、僕も立ち上がる。

「キャンプに帰ろ、私お腹空いちやった」

お腹をさする旦那さん。

「うん……わかったにや」

僕はコクリと頷くのだった。

五話・森の異変（前編） 中（後書き）

とりあえず投稿。

五話・森の異変（前編） 下

「にゃふふふふ、これでアオアシラのやつを……」

罨やら球状のよくわからない物やらが散乱する中心で、不気味に笑いながら、自分の武器に何かを塗りつけるグンジョー。

キャンプに帰ってから、ずっとあの調子で罨作製などの作業をしているのである。

「グンジョー、そろそろ作業をやめにしない？」

私としては、罨とかより先にご飯を作って欲しいのだが……。

「うん、分かったにゃ」

私が何度呼び掛けても、こんな具合に空返事をするだけで、一向に作業を止めようとしない。

今日の失敗が余程悔しかったのか、今のグンジョーはアオアシラを倒すことに頭がいっぱいのようだ。

「完成だにゃあ！」

そう言って、嬉しそうに武器を掲げてみせるグンジョー。

グンジョーの武器を持つ反対の手には、一本のキノコが握られていた。

「また毒？」

そう言って、私は少し顔をしかめる。

確かにあの時ドスジャギイを討伐できたのは、毒の力によるところが大きい。だが、その毒によって私が（空腹感に）苦しめられたことも事実なのだ。

「いや、探したんだけど毒テングダケが見つからなかったから、今回は別のキノコで代用だにや」

そう言って、グンジョーは手に持つキノコを私に見せた。

毒テングダケが毒々しい紫色なのに対して、このキノコは薄い水色の比較的地味な色合いをしている。まあ、地味とはいっても、明らかに食べられるようには見えないので、十中八九なんらかの毒キノコなのだろうが……。

「これってどんなキノコなの？」

一応グンジョーに尋ねておく。

「クタビレタケって言う、スタミナを奪う成分を含んだキノコだよ。本来はボウガンの弾とか矢の先に塗って使うものだけど、こういう風に武器に塗って使えなくもないにや」

何か、使えるのか使えないのか、よくわからない曖昧な表現である。

ジャギイのときと比べると、なんだか作製している道具が多い。もしかすると、グンジョー自身効果的かどうか分かってないのかもしれない。

まあ、何もしないよりはマシって程度だと思っておこう。

「それより、いい加減にご飯にしようよ」

お腹を押さえながら、私はグンジョーに訴えた。同時に、低くなるような音が私のお腹から出た。

「ああ、ごめんにゃだんにゃさん。すっかり忘れていたのにゃ!？」

そう言って、グンジョーは慌てて料理を作り始めるのだった。

昨日と同じ、山中の御神木付近に身を隠し、アオアシラを待つ旦那さんと僕。効率は悪いが、昨日の二の舞になっては困るので、今日は一緒に張り込んでいる。

そして、張り込む僕の耳に獣の歩く音が聞こえてきた。

「来た……」

「来たようだにゃ……」

近づいてくる足音に、僕と旦那さんはほぼ同時に反応する。

アイルーである僕の耳は、人の耳よりも小さい音を拾いやすいはずなのだが、僕に聞こえる音はだいたい旦那さんにも聞こえている。まったく、ハンターとは凄いものである。

ほどなくして、討伐目標であるアオアシラが姿を現した。

僕と旦那さんには気づいていないらしく、アオアシラはゆっくりと御神木の幹にある大きな蜂の巣へと歩いて行く。

「だんにゃさん、攻めるにやらもう少し待って、あいつがハチミツに夢中になってからの方が良いにゃ……」

そう言っ、ちらりと旦那さんの顔を見る。

「……………」

案の定というか何というか、ウズウズと今にもアオアシラに突撃して行きそうな旦那さん。

しかし、旦那さんは何でこうもモンスターと戦いたがるのだろう、何かモンスターに恨みでもあるのだろうか？

モンスターに殺された家族や友人の敵討ちのため、ハンターを目指すというケースは多々あるのだ。もしかしたら、旦那さんもその口なのかもしれない。

「まあ、いちいち詮索するようなことじゃないにや……………」

誰にも聞こえないような声でつぶやく。

だいたい、今は狩りの真っ最中だというのに、僕は何余計なことを考えているのだろうか…………。

思考を切り替えるため、ぺちぺちと両手で自分の頬を叩く。

僕がそんな事をしていてと――

「…………よし、行ける！」

そう言っ、旦那さんが突然走り出した。

いつの間にかアオアシラは蜂の巣の前まで移動しており、蜂の巣の一部を破壊して食べ始めた。

「あつと、出遅れたのにや！？」

僕も急いで駆け出し、旦那さんを追う。

アオアシラは、近づく旦那さんと僕にまったく気がついていない

ようだ。何やら、夢中で蜂の巣を貪っている。

「てええい!!」

そして、旦那さんは武器を振り上げると、隙だらけのアオアシラに思い切り振り下ろした。

「とおう!!」

と、ちよつとぬけた掛け声と共に、グンジョーが自分の武器であるジャギネコナイフを投げる。

投擲されたジャギネコナイフは、アオアシラの肩にある傷口をわずかに決るように、やや変則的な軌道を描いて飛び、グンジョーの手元に戻った。

アオアシラの肩にある傷は、先ほど私が切りつけて出来た傷跡である。

あまりダメージはないだろうが、グンジョーの一撃でアオアシラの開いた傷口から再び血が流れ出す。

アオアシラの意識が、一瞬私からグンジョーに移る。

「ええい!!」

隙のできたアオアシラのわき腹を、回転して勢いをのせた武器で切りつけた。反撃を避けるため、切りつけた勢いのまま転がり、距離をとる。

「あんまり効いてないか……」

アオアシラを切りつけた箇所を確認するが、傷口は浅くわずかに血がにじむ程度である。

私の使う片手剣という武器は一撃が軽く、大型のモンスター相手だと急所をねらうか、同じ場所を何度も攻撃しないと、ろくにダメージを与えられないのである。

アオアシラは、私を無視してグンジョーの方へと走り出した。

「あ、やばっ！」

急いでアオアシラを追いかける。

「うにやにやあ!？」

妙な声を上げて、飛び掛るアオアシラの攻撃を紙一重でよけるが、バランスを崩してごろごろと転がるグンジョー。

「うひいー、目が回るのにや……」

そう言って、グンジョーがフラフラと起き上がる。

そんなグンジョーに向かって、アオアシラが追撃に腕を振る。

「グンジョー！ 危ない！」

「うにやっ!？」

私の声に反応してか、グンジョーはアオアシラの攻撃を、武器を盾にする事で防いでいた。

衝撃で、大きく後ろに後退するグンジョー。

「グンジョー、大丈夫!？」

アオアシラの動きに警戒しながら、グンジョーに駆け寄る。

「にゃ、にゃんとか……」

上手く防御できたらしく、グンジョーに怪我はないようだ。一安心である。

ただ、結構体力を消耗しているようで、少し辛そうに見える。

「グンジョー、まだやれる？」

「もちろんだにゃ、だんにゃさん」

私が尋ねると、グンジョーは、気合を入れるように武器を構えなおした。

まだまだ大丈夫なようである。

「そう、じゃあ援護お願い」

そう言うと、私はアオアシラへ向かい駆け出したのだった。

それは、アオアシラとの戦闘を始めてからしばらく経過したころのことである。

アオアシラの動きが急に鈍くなり、だらだらと口からよだれが垂れだしたのだ。私が距離を取っても、アオアシラが追いかけてくるようすはなく、じっとその場に止まっている。

「どうなってるの？」

馬鹿みたいに攻撃してきたアオアシラの急な変化に、私は首をか

しげる。

「うーん、これは効果が出たとみていいのにかにゃあ？」

私の隣でアオアシラと自分の武器を交互に見ながら、グンジョーが言う。

「グンジョー、あのアオアシラってどうなってるの？　あまりダメージを与えていなはずなのに、やけに動きが鈍いけど……」

何か知ってそうな事を言っていたので、グンジョーに尋ねる。

「スタミナ切れってやつだと思うにゃ。クタビレタケの効果が出たのか、普通にスタミナが切れたのかは分からにゃいけど、アオアシラは今疲れているのにゃ」

そういえば、そんな物を武器に塗っていたなと思い出す。

「要は、今が攻撃チャンスってことだよね？」

「そうだにゃ」

グンジョーの返答を聞いた瞬間、私はアオアシラに向かって走りだしていた。

つまり、私が戸惑っている間、アオアシラはスタミナの回復を図っていたということである。

「てりゃあ！」

私は、掛け声と共にアオアシラに切りかかった。狙いは、肩にあ

る傷である。

私に反応したアオアシラが避けようとしたことで、狙った場所ではなく後ろ足の付け根付近を切り裂くハイドラナイフ。すると傷口から、勢いよく血が噴出した。

「うわっ」

少し驚いて、咄嗟に側転してアオアシラとの距離を離す。

そんな私と同時に、アオアシラが飛びのくように転がり、悲鳴のような鳴き声をあげながらもがきだした。

どうやら、お尻辺りがアオアシラの弱点のようである。

「あつ、しまった!？」

そんな事を考えている間に、アオアシラは起き上がり始めてしまった。

「とりやあだにやー!!」

咄嗟に追撃しなかった事を、私が後悔しかけたとき。グンジョーの妙な掛け声と共に飛んできたジャギィネコナイフが、ドクドクと血を流すアオアシラの後ろ足の傷口に突き刺さった。

再び、悲鳴のような鳴き声をあげて転がるアオアシラ。

「グッジョブ、グンジョー!」

後ろにいるグンジョーに聞こえるように、大声で言うと、今度はアオアシラに追撃をしかける。

「てええい!!」

振り上げたハイドラナイフを、思い切り振り下ろした。大量の血が噴出し、刺さっていたジャギィネコナイフが抜けて地面に落ちる。ジャギィネコナイフに気をとられた、その一瞬にアオアシラが腕を振って反撃してきた。

「……っわ!？」

無理な体勢からの反撃だったため、かすれるようにしか当たらなかったが、それでもよろけて尻餅をついてしまった。

咄嗟に盾を自分の前に突き出して、アオアシラの追撃に備える。だが、アオアシラは、転んだ私を追撃しようとはせず、足を引きずって逃げだしてしまった。

攻撃を受けたのがこのタイミングで良かった、少し前に受けていたら間違いなく追撃されて、かなり不味い状況になっていただろう。

「だんにゃさん!」

私が少しほつとしていると、すぐにグンジョーが駆け寄ってきた。

「大丈夫、かすっただけ」

すぐさま起き上がり、アオアシラの逃げた方へ駆け出す。

ここで逃がしたら、アオアシラは傷と体力が回復するまで隠れて出てこないだろう。できれば、今日中にけりをつきたい。

こうして、私とグンジョーは逃げるアオアシラを追いかけるのだった。

足を怪我した状態では、私達を撒くのは無理と判断したのか、アオシラは走りを止めて振り返った。

立ち上がり、両腕を広げて威嚇するように吠えるアオシラ。後ろ足の傷は癒えておらず、いまだにダラダラと血が流れ続けている。

「ここで決着をつけようってわけね、いい度胸じゃない」

柄にもないことをつぶやき、武器を構える。

あのまま追いかけて続けても、いずれは私の体力が尽きて逃げられるのが落ちだったのだから、正直ありがたい。

「だんにやさん、一応罨とか持ってきてるけど、どうするにや？」

私の横に並んで、ポーチをあさりながら尋ねてくるグンジョー。

「うん、使えそうなら使ってことで！」

そう言って、私はアオシラに向かって駆け出した。

長時間走り続けたことで、私の体力もかなり減っている。

先ほどまでと違い、このままアオシラとやり合うのは少々不安である。かと言って罨を張ろうにも、アオシラの目の前では、張っても引つかかってくれるはずがない。

まあ、こんな時、私の頭に妙案が浮かぶなんて事はまずありえないのだ。こういう時は、私が時間を稼いで、その間にグンジョーに妙案を思いついてもらうのである。

作戦名、丸投げ。

我ながらナイスな作戦である。

「でえい！」

馬鹿なことを考えつつ、アオアシラに切りかかる。

余計な事を考えていたのがまずかったのか、腕で防御され、硬い物どうしがぶつかり合うような音を出して、ハイドラナイフは弾かれてしまった。

「くっ！？」

バランスを崩し、よろける私。

そして、振りかぶられるアオアシラの右腕。

「しまっ——」

咄嗟に盾で受けることだけは成功したが、崩れた体勢では衝撃を受け流すことができず、そのまま殴り飛ばされた。

「がアっ！」

地面に背中を打ちつけ、さらに二回はど転がってようやく勢いが止まった。

「——くっ——ハア——！？」

上手く呼吸ができず、体も上手く動かない。
力を入れて、無理やり体を動かそうともがくと、私に突進しようと走ってくるアオアシラが見えた。

マズイ——

私がそう思った瞬間――

「やらせないにやー!!」

そんなグンジョーの叫び声と共に、アオアシラに向かって球状の物体が飛んで行き、甲高い音を炸裂させた。

苦しそうなうなり声をあげて転び、じたばたともかくアオアシラ。

「いまだにやあー!!」

グンジョーが私を飛び越すようにして、アオアシラの方へ駆けて行く。

そして、もかくアオアシラに攻撃するでもなく、地面に何かを仕掛け始めた。

「ハア……よし……」

だいぶ呼吸も楽になり、私はようやく起き上がることができた。

「だんにゃさん、大丈夫かにゃ!？」

仕掛けを終えたのか、戻ってきたグンジョーが心配そうに声をかけてくる。

「大、丈夫よ……。それより、あれって……」

呼吸を整えながら、グンジョーが何かを仕掛けた地面を指差す。

「音爆弾で怯んでいる間に仕掛けたから、たぶん引つかかると思う

のにゃ」

あの甲高い炸裂音は、どうやら音爆弾が爆発した音だったようである。

音爆弾とは、モンスターの内臓器官の一つ『鳴き袋』を加工した物で、爆発すると高い周波数の音を発する手投げ爆弾である。主に、地中や水中の音で獲物を探すモンスターに有効。

「アオアシラにも効いたんだ……」

そんな風に私が一つ賢くなっていると、もだえていたアオアシラが起き上がった。そして立ち上がると、先ほどと同じように両腕を広げて吠える。

ただし、先ほどと違い、アオアシラは荒く白い息を吐き出している。

「だいぶ怒ってるのにゃ……」

グンジョーがそう言ったとき、アオアシラは私を睨むようにして走り出した。どうやら、ターゲットは私のものである。

そして、アオアシラが私に飛びかかろうと前足で地面を強く踏みつけた瞬間、地面から破裂音が響きシビレ罠が作動した。

やはりもうほとんど体力が残っていないのか、罠に拘束されてもがくこともできないアオアシラ。

私はアオアシラに向かって走り出す。

「りゃあああああ!!」

そして、ハイドラナイフを振り上げると、アオアシラの脳天に叩

きつけるように振り下ろした。

咽の奥から搾り出すような、そんな末魔の声を出して崩れるように倒れるアオアシラ。

こうして私達は、クエスト内容の一つであるアオアシラの討伐を完了したのである。

五話・森の異変（前編） 下（後書き）

書き終えてから、溪流のキャンプにテントが無い事に気がついた。
今更なのでこのまま行きます。気になる方がいたらゴメンなさい。

とりあえず投稿。

六話・森の異変（後編）

「あゝ、疲れたあー」

キャンプに戻って早々、荷物をベツトの上に放り捨て、自身もベツトに倒れ込む旦那さん。

「だんにゃさん、寝るなら、せめて武器の手入れをしてからにしたらどうかにゃ？」

まあ、すぐに寝たいという、旦那さんの気持ちも分からなくはないが、武器はこまめに手入れしないとすぐに劣化してしまう。

明日もクエストは続くのだし、手入れはしっかりするべきである。

「あー、うん……やる」

ムクリと上半身を起こし、ダルそうにこたえる旦那さん。旦那さんはポーチとハイドライフを手元に引き寄せると、ゴソゴソとポーチをあさりだした。

「だんにゃさん。ボクちよっとお腹空いて、今から何か作ろうと思っっているけど、だんにゃさんも食べるかにゃ？」

アオアシラの討伐を終え、戦闘の緊張感が途切れたとたんに、急に思い出したかのようにお腹が空いてきたのだ。こんがり肉とかこんがり魚とか、がつつりとポリュームのある物が食べたい気分である。

「うーん、今はいいかな。でも、一眠りしたらお腹空くだろうし、

私の分も作っておいて」

武器の刃に付いた血をぬぐう手を止め、お腹をさするような仕草して答える旦那さん。

もしかしたら、アオアシラとの戦闘というハードな運動を終えたばかりで、胃が食べ物を受け付けないのかもしれない。

「りょーかいだにゃ！」

そう言っで、飛び上がりながら左手を振り上げた。

今僕の分と一緒に作っても良いが、旦那さんにはできたてを食べてもらいたい。旦那さんの分は、時間を見計らって作ることにしよう。

僕は肉焼きセットを組み立てると、食料品の樽から塩漬けの肉を取り出し、取り付けた。

「タンタタン、タララ〜」

肉焼きセットに火をつけ、適当なリズムを口ずさみながら、均等に火が通るようにゆっくりと取り付けた肉を回していく。

「明日は魚が良いかもにゃあ」

さっき、たまたまこんがり魚の事を思い浮かべたことで、ちょっと魚を食べたくなってしまった。

僕は、明日に釣りでもして、たまには新鮮な魚を食べようと思ったのであった。

「釣れないねー」

「釣れないにやあ」

私とグンジョー、二人並んで釣り糸をたらした水面をながめる。クエスト中なのに何故呑気に釣りをしているのかと言うと、今朝ご飯を食べ終えたあと、グンジョーが釣りをしたいと言い出したからである。何でも、たまには新鮮な魚を食べたいらしい。

アオアシラの討伐は済んだことだし、新鮮な魚を食べたいという意見には私も賛成だったので、こころよく許可を出したのである。別に私が同行する必要はなかったのだが、グンジョー一人では何かと心配である。それに、一応溪流の調査とも言えなくはないと言う事で、私も一緒に釣りをする事にしたのだ。

私が釣りをしているのは、あくまでも調査の一環である。

別に、一人で溪流を回るのがつまらなさそうだったとか、一度もやった事がないからやってみたくなったとか、そういう理由ではない……断じて。

「グンジョー、釣りってこんなに退屈なものなの？」

グンジョーに尋ねる。

釣りを始めたのは朝だったのに、今はもうお昼である。いままで釣れた魚の数はゼロ、いわゆるボウズというやつだ。

エサの付け方とか糸の結び方とか、いろいろ新鮮で最初は楽しかったのだ。だけど、さすがに釣れないどころか、エサに食いつこうとする魚影すら確認できないのは予想外である。

こんな事なら、普通に溪流の調査をしていた方が良かったかもしれない。

「うーん、一匹も釣れないってことはたまにあることだけど……。
エサに食いつきもしないのは珍しいのじゃあ」

自分の釣り糸を引き上げ、まだエサが付いているのを確認して首
をかしげるグンジョー。

「元々、ここには魚がいなかったとか？」

「いや、二日目到这里を調べたとき、アオアシラが残した魚の食べ
かすがあったのじゃ」

そういえば、アオアシラの痕跡を探しているときに、そんな物が
あったような気がする。よく覚えていないが、グンジョーが言うな
らそれはここにあったのだろう。

「じゃあこの五日間で、モンスターだけじゃなく、魚までいなくな
ったってこと？」

「隠れているのか、どこかに逃げたのか……何か悪い事が起きる前
触れじゃなければ良いのだけどじゃ」

と、グンジョーが言ったとき、私の頬に一粒の水滴が当たった。

「ん？」

私が上を向くと、パラパラと雨が降り出した。

「雨だにや。だんにやさん、雨脚が強くなる前にキャンプに戻らに
やい？」

いそいそと、自分の釣り道具を片付けながら私に尋ねるゲンジョ
ー。

「そうだね、そうしょっか」

そう言っつて、私も釣竿を片付けてポーチにしまっつ。

こうして、私とゲンジョーは釣りを中断して、キャンプへと急ぐ
のだった。

それは、私とゲンジョーがキャンプまでの道のりを、ちょうど
半分くらい進んだ時だった。

突然、私達が釣りをしていた河原の方から、空気を裂くような破
裂音が聞こえてきたのである。

「何！？」

「何にや！？」

驚いて同時に振り返る私とゲンジョー。

振り返ると、河原の方にうつすらと煙のような物が立ち上ってい
ることに気が付いた。

腕を組み、煙についての考えをめぐらせる。

「どうやら、カミナリが落ちたみたいね」

恐らく、雷が落ちて、直撃した木が燃えているのだろう。

「……うーん、なんだかにゃあ」

そう言っつて、ゲンジョーが私の横で首をかしげている。

何か引つかかるような事でもあるのだろうか？

「どうかしたの？」

「だんにゃさん、あの距離に雷が落ちたのだとしたら、もっと大きな音が鳴らないかによ？」

気になり尋ねると、グンジョーはそう言って煙の上がる場所を指差した。

「うーん、どうだろ？ いきなり聞かれても、よく分からないや」

そう言って、私も首をかしげる。

「見えないほど遠くに落ちた雷でも、結構大きな音がするのによ」

「ふーん、そういうものなんだ。私、カミナリって遠くでゴロゴロ鳴ってる印象しかないからなあ……」

実際、ここ一年ぐらいカミナリの落ちる音を聞いた覚えはない。

「あれ？ そういえば、ゴロゴロ鳴ってないよね？」

自分の言葉で、雷鳴が鳴ってないのを不思議に思い、空を見上げた。

薄い雲が、パラパラと小雨を降らしている。

「だんにゃさん、それだにゃ！ 雷が落ちたのに、雷鳴が鳴らないのはおかしいのによ！」

そう言って、グンジョーは腕を組んで、ウンウンとうなずいた。
そして、空の雲を指差すグンジョー。

「雷鳴っていうのは、放電現象で加熱された空気が膨張して発生するのじゃ。だから、雷が落ちた後には雷鳴が鳴るはずなのじゃ」

なんだか、急によくわからないことを言い出すグンジョー。

「えーと、つまり……雷は落ちてないってことね？」

まあ、言っている事はよくわからないが、言いたいことはこういう事だろう……たぶん。

「そう言うことだにや。つまり、あそこには雷のような何かを発生させた、何かがあるはずだにや」

凄く適当な感じで答えるグンジョー。

「じゃあ、とりあえず行ってみようか……もしかしたら、それがモンスター達がない理由かもしれないし」

こうして、私達は煙の立ち上る場所を目指して移動を開始したのであった。

煙が立ち上っていたのは、森のクエスト初日に僕が蜂の巣の残骸を見つけた辺りからだった。一本の木が、まるで巨大な斧を振り下ろされたかのように縦に裂けており、その裂け目は黒くこげていて、

いまだに薄らと煙を立ち上らせていた。

そして、その木を中心にして、数本の木が横にへし折れていた。

「うわ、何か凄い事になってるよ……」

驚いたようすの旦那さん。

「これは、いったい何があったのにや……?」

様変わりした森の景色に、思わずつぶやく。

一瞬、やはり雷が落ちたのではと考えるが、すぐにその可能性を否定する。

中心の木はまるで雷に打たれたような有様だが、周辺の木は何か強い力でへし折られたような様子なのである。やはり雷だとは考えられない。

恐らくだが、大型モンスターか何かが、ここで暴れたのではないだろうか?

そして、雷に打たれたような木も、そのモンスターがやったのではないだろうか?

「雷に打たれたような木に、大型モンスターにやあ……」

僕は一匹だけ、そういうことができそうなモンスターに心当たりがあった。

知識としてそのモンスターを知っているだけなので、本当にできるのかは分からないが、恐らく、そのモンスターならこの状況を作り出す事ができるであろう。

嫌な汗がダラダラと背中を流れる。

状況から予想しただけで、それが正解だという証拠などない。できればこんな予想など、はずれてほしい。

だが、悪い方向には、そういう予想や勘はよく当たるものである。

「グンジョー、これ何だろう？　大きな足跡みたいなのがあるんだけどー」

そのとき、手招きするような仕草をしながら、よく通る声で旦那さんに呼ばれた。

僕は、急いで旦那さんに駆け寄る。

旦那さんが指差す地面。そこには、アオアシラの三倍ほどの大きさの足跡が残されていた。

それも、飛竜種や鳥竜種のような二足の生物の足跡ではない、牙獣種のような四足の生物の足跡である。

予測が、確信に変化した。

「だ、だんにゃさん……ひ、引き返した方が良いにゃ」

恐怖心からか、震える声で旦那さんに訴える。

ジャギイとかアオアシラとか、そういうレベルのモンスターではないのだ。

僕は、今すぐにここから離れたいと思うのだった。

「グンジョー、いきなりどうしたの？」

急に、引き返した方がいい、と言い出すグンジョーに私は首をかしげる。

聞こえていないのか、グンジョーからの返事はない。

どうも、先ほどこからグンジョーのようすがおかしいのだ。この辺りを調べてから、何かに怯えるように震えながら、しきりに周りを警戒している。

私の足元の大きな足跡。たぶん、この足跡の持ち主に怯えているのだろうけど、そんなに恐ろしいモンスターなのだろうか？

「この足跡のモンスターって、どんな奴？」

もう一度グンジョーに声をかける。今度はちゃんと聞こえたようで、私の方を向くグンジョー。

「だ、だんにゃさんが今まで戦ってきたモンスターとは、比べ物にならないくらいに強いモンスターだにゃ……」

挙動不審に左右を見ながら、私の質問に答えるグンジョー。

私が今までに戦ったモンスターというと、アオアシラと一月前に討伐したドスジャギイ、それとジャギイなどの小型モンスター数種である。どのモンスターと対峙したときも、グンジョーがこのように怯えることはなかった。

本当に危険な、熟練のハンターでも苦戦を強いられるような、そんなモンスターなのだろう。

私は得物であるハイドラナイフを手にとると、その質感を確かめるように握りこむ。

「そいつは、何ていうモンスターなの？」

辺りを警戒しながらグンジョーに尋ねる。

「そのモンスター名前は――」

と、グンジョーがモンスターの名前を言おうと口を開いた時……。何処からともなく、地面を踏みしめて歩く音が聞こえてきた。

「ニヤヒッ……」

「!？」

武器を構える私と、怯むグンジョー。

段々と薄暗くなるなか、それは現れた。

威圧感を感じる鋭い眼光、力強さを物語る発達した四肢、そしてその圧倒的な存在感。

グンジョーの言うとおりだ……。今まで私が戦ったモンスターとは全然比べ物にならない。

「ら、雷狼竜ジンオウガ——」

グンジョーがその名を呼ぶ。

「ジンオウガ……」

つぶやくようにその名を呼ぶ。

恐怖心からか、それともこの妙な高揚感からか、不思議と笑みがこぼれる。

そして、気づけば、私は走り出していた。

「ハアア！」

振りかぶったハイドライフを、ジンオウガ目掛けて思い切り振り下ろす。

ジャギイなどとは違い、ジンオウガの皮膚は鱗が重なってできた甲殻というものに覆われている。

多少隙は大きいが、こういう体重を乗せられる攻撃じゃないと、ろくにダメージを与えられないと感じたのである。

しかし、ジンオウガが前足を軽く引いたことで、私の攻撃は簡単に避けられてしまった。

「な!？」

突然のことに、私は武器を振り下ろした状態で硬直してしまう。そこに、引かれたジンオウガの前足が勢いをつけて戻ってきた。

「うわぁっ」

咄嗟に盾で受けたにもかかわらず、私は後ろに殴り飛ばされてしまった。

邪魔だから蹴り飛ばした、そんな感じの攻撃だったにもかかわらず、アオアシラから受けた一撃と同等以上の威力に思えた。

ゴロゴロと転がり、ジンオウガからだいたい離れたところでようやく止まる。

「くそぉ……!」

追撃を避けるため、手足に力を入れてすぐに起き上がろうとする。幸い、今回はどこかを強打するとかはしなかったので、すんなりと起き上がる事ができた。

すぐさま盾を構え、ジンオウガの動きを確認する。

「……………」

ジンオウガが追撃してくるような気配はない。
それどころか、私の方を見ずに、睨むようにじつと空を見つめて
いる。

「…………私なんて眼中にないってか？」

どうやら、敵として認識されていないようである。
ジンオウガにとっては、私よりも強くなっていく雨の方が気になるらしい。

「…………なめやがって」

ボソリと、そんな言葉がもれる。

私はハイドラナイフを、強く握りなおした。

「りゃあああああ！！」

攻撃の隙とか、ジンオウガの動きとか何も考えずに突っ込む。そして、自分の感情に任せるままに武器を振る。

感情任せの単純な攻撃が、このジンオウガに通用しないことなど分かっていて。今の私じゃあ、敵わないことも……………感じている。けれども、何故かそうせずにはいられなかった。

先ほどと同じような動作で、簡単に私の攻撃を避けるジンオウガ。そして、目障りな虫を相手にするかのように、先ほどと同じ動作で蹴りが飛んできた。

私など眼中にないのだと、私にかまうほど暇ではないと、そう言

うかのように……。

「なめんなああああ!!」

吼えるように叫び、迫るジンオウガの足を盾で殴りつけた。だが、当然そんなものでジンオウガが怯むはずもなく、逆に殴りつけた盾が弾かれてしまう。

弾かれたおかげで、ジンオウガの蹴りの直撃は受けず、代わりに体をかすめるように前足が当たる。

私はジンオウガの蹴りの勢いを利用してからだを回転させると、その勢いのままハイドライフを振りぬいた。

低くうなり、一瞬体を震わせるジンオウガ。

わずかだが、ジンオウガの胸元から血がたれる。

私は、転がるようにしてジンオウガの足の下をくぐると、ジンオウガから距離を置く。

「よし……!!」

小さくガッツポーズをとる。

私をなめきっていたジンオウガに、一泡吹かせることが出来たのだ。

「っと、気を引き締めないと」

倒した訳じゃない、私はジンオウガに一撃加えることができただけなのだ。

盾を構え、慎重にジンオウガの動向をうかがう。

ジンオウガは、ようやく私を敵と見なしたらしく、睨みつけてく

ると低くうなりだした。

「何？」

私を睨みながら、うなつて吼えるを繰り返すジンオウガ。

突然、ジンオウガの周りに青白い光の球が浮かび上がり始める。

同時に、ジンオウガの体のあちらこちらにも、それに呼応するように光だした。

一定間隔ごと、ジンオウガが吼えるたびに段々と光はその強さを増していく。

その光景は恐ろしくも、美しく、そしてとても幻想的だった。

そして、ジンオウガが高く遠吠えすると、光の球が一斉に放電し、まるでカミナリが落ちたような爆発を起こした。

「つつ……」

思わず盾を構えて目をかばう。

爆風が収まり、盾越しにジンオウガのようすを覗き見る。

すると、そこには――

身体中に青白い小さなカミナリを纏った、強烈な威圧感を放つジンオウガがそこに居た。

恐ろしいまでの存在感に、思わず体が硬直してしまう。

元々とてつもない存在感を持っていたが、カミナリを纏った前後ではまるで別物である。

そして、体の硬直がとけた次の瞬間、凄まじい勢いでジンオウガが飛びかかってきた。

「うわっ!？」

私に向けて振り下ろされる前足を、咄嗟に転がり避ける。
振り下ろされた前足は、放電しながら小さな地震のように地面を
振動させた。

そして、私が起き上がるうとしたその瞬間――

「しまっ――」

かんぱついれずに放たれた、もう一方の前足が私に振り下ろされた。

まるで時間の流れがおかしくなったかのように、ゆっくりと迫る
ジンオウガの前足。

回避を試みるも、私の体は動いてはくれない。

そして――

雷狼竜ジンオウガ。

圧倒的な存在を前にして、恐怖のあまり、僕は動くことができなかった。

硬直する身体に、ガクガクと震え言う事を聞かない手足。

そんな僕を尻目に、旦那さんがジンオウガに向かって駆け出して
いく。

「ハアア！」

旦那さんはハイドラナイフを振り上げ、飛び込むようにしてシンオウガに切りかかる。だが、シンオウガは前足を一步下げるだけで、簡単に旦那さんの攻撃を避けてしまった。

そして、下がったシンオウガの足が振り子のように戻り、旦那さんを蹴り飛ばした。吹き飛び、ゴロゴロと地面を転がる旦那さん。

「だんにやさん!!」

その瞬間、身体の硬直と手足の震えがなくなり、僕は駆け出した。

「だんにやさん、大丈夫かにや!？」

旦那さんに駆け寄り、声をかける。

見ると、雨の中地面を転がったせいで所々泥で汚れてはいるが、

旦那さんに大きな怪我はないようだ。

少し安心した。

「くそぉ……」

旦那さんは起き上がると、悔しそうにシンオウガを睨み付けた。

しかし、シンオウガは僕や旦那さんのことなど眼中にないと言わんばかりに、空を見上げていた。

「なめやがって……」

ボソリとつぶやく旦那さん。どうやら、相当キレているらしく、言葉がなんか荒々しい。

まあ、足蹴にされ、そのうえであのような態度を取られたのだ、

旦那さんが怒るのも当然かもしれない。

「だんにゃさん、ジンオウガに敵視される前に、引いた方がいいにや。今の僕達で、あれを倒すのはむりだにゃあ！」

今がチャンスなのだ、何かは分からないが、ジンオウガが別の何かに氣をとられている今が……。

必死に旦那さんに訴える。

ここでジンオウガと戦ったって、無駄に命を散らすだけだ。情けない話しだが、僕にはジンオウガと戦って勝てる気がないのである。

「りゃあああああ！！！」

しかし、そんな僕の訴えは、旦那さんの耳に届かなかった。

ジンオウガへと、一直線に駆け出す旦那さん。旦那さんは叫び声を上げると、振り上げたハイドラナイフをジンオウガに向かって振り下ろす。

先ほどと同じ動作の攻撃、当然ジンオウガは同じように避ける。

そして、同じようにジンオウガが旦那さんを蹴り飛ばそうとしたとき――

「なめんなああああ！！！」

大声で叫ぶと、旦那さんはジンオウガの足の動きに合わせて身体を回転させ、蹴りを受け流す。そして、その勢いをのせたハイドラナイフで、ジンオウガの胸部を切りつけた。

「うおおおお！！ 凄いにゃだんにゃさん！！！」

旦那さんの見事な攻撃に、思わずガッツポーズを取ってしまう僕。見れば、ジンオウガから距離を取った旦那さんも小さくガッツポーズしていた。

ジンオウガは、旦那さんを敵と見なしたようで、睨みつけ威嚇するように低くうなる。

旦那さんを睨みつけ、吠えてうなるを繰り返すジンオウガ。

突然、ジンオウガの周りに、青白い光の球が浮かび上がった。

「あれは……！」

ジンオウガが吠える度に、段々と強くなる光。

ジンオウガの遠吠えと共に、光球は一斉に放電し、まるで雷が落ちたかのような衝撃音を響かせた。

そして、青白い電気を纏ったジンオウガが姿を現した。

再び硬直する僕の身体。

超帯電状態という、ジンオウガが怒った時に見せる姿。僕の知識が正しいのなら、この状態になる前と後では、強さの桁が違う。

ジンオウガが旦那さんを睨みつける。

ジンオウガに威圧されてか、旦那さんは動こうとしない。もしかしたら、僕と同じように、身体が動かないのかもしれない。

「ま、不味いのじゃ!？」

その瞬間、急に身体の硬直が解けた。

僕は、旦那さんに向かって走り出した。

理由は分からない。一層威圧感を増し、さっきよりも恐ろしいジ

ンオウガ。それなのに、何故か硬直は解け、何故か手足も震えない。

「うわっ!？」

僕が旦那さんの所へ到着するより早く、ジンオウガが旦那さんへと飛び掛った。

転ぶように倒れ、旦那さんはかろうじてジンオウガの攻撃を避ける。

地面に振り下ろされたジンオウガの前足が、巨大なハンマーで地面を殴りつけたかのような振動を起こす。

そして、間を置かず次への攻撃に移ろうとするジンオウガ。

「だんにゃさん、嫌だにゃ!！」

大声で叫び、全力で走る。

僕は臆病者だ、ジンオウガが恐ろしい。

できるのなら、今すぐにでも逃げ出してみたい。

だけど、僕にはジンオウガよりも恐ろしい事がある。

だから、逃げられない。

だから、こうして走るしかない。

僕は大切な家族がいなくなるのが、何より恐ろしい。

そして、旦那さんは僕の大切な家族だ。

そんな旦那さんがやられるのを、見ていだけなんてできるはずがない。

「うわあああああああああ!！」

泣き叫びながら、旦那さんに体当たりする。火事場の馬鹿力というやつか、僕の体当たりでも旦那さんを少しだけ移動させる事ができた。

「!?」

驚愕と言った風に目を見開き、よく聞こえないが何かを叫ぶ旦那さん。

それが僕の見た、最後の光景だった……。

「……え？」

何が起こったのか、はじめは分からなかった。

不思議とゆっくり流れる時間の中、私は迫るジンオウガの腕をただ見ていたのだ。

逃げようにも身体が動かず、あきらめながらただその瞬間がやってくるのを待っていたのだ。

そこで、いきなり真横から何かがぶつかるような衝撃を受けた。小さな衝撃だったが、体勢を崩していた私を転ばすには十分な威力であった。

吹き飛ぶように転び、何がぶつかったのか確認しようと顔を向ける。

今にも振り下ろされるであろうジンオウガの前足の真下、今さっき私がいたはずの場所に、何故かグンジョーが倒れていた。

「グンジョー!？」

目を見開き、叫ぶ。

そして次の瞬間、ジンオウガは槌のように前足を振り下ろした。低い衝撃音と共に、地面が振動し、叩きつけられたジンオウガの前足から青白い電撃が放出された。

そして、大きく放物線を描いて吹き飛ぶ、見慣れた深い青色の小さな身体。地面に叩きつけられ、ボールのように二三度跳ねて止まる。

そのまま、グンジョーは動かなくなった。

「ぐんじょー……?」

そうつぶやいて、私はようやく何が起こったのかを理解した。

理解した瞬間、頭の中が真っ白になった。

私は立ち上がると、ふらふらとグンジョーに向かって歩き出した。

「があっ……」

途中、何かにとてつもない力で押し出され、受身もとれずにゴロゴロと転がる。

起き上がろうと力を入れると、身体中がきしむ。そして、小石が何かで切ったらしく、額から垂れた血が降り注ぐ雨に混じって地面に落ちた。

「うぐう……」

だけど、今はそんな事、どうでも良かった。
身体に力を入れて、無理やり起き上がる。少し苦しいが、何故か痛みは感じなかった。

グンジョーの横まで歩くと、私は地面に膝を付いた。

「起きて、グンジョー……起きてよう」

ゆさゆさとグンジョーの体を揺する。

しかし、いくら揺らしても、ぼろぼろのグンジョーはピクリと反応しない。

私は、グンジョーを抱き上げた。

「うう……やだよお、ぐんじょお」

瞳からあふれ出る涙が、雨より一回り大きな雫となってボタボタとグンジョーの顔にかかる。

「起きてよお……」

それでも、グンジョーの体は動かないままだった。

「わたしのせいだ……」

動かないグンジョーを抱きながら、小さくつぶやく。

私が無謀にジンオウガへ突っ込まなければ、きっとこんな事にはならなかった。

感情で動かずに、ちゃんと冷静になっていれば、きっとこんな事にはならなかった。

私の腕の中で、ピクリとも動かないグンジョー。

本当なら、私がこうなるはずだったのに……。

「なんで……何で私なんかを庇ったのよ、グンジョー」

ジンオウガに簡単にあしらわれたのが悔しくて、私なんて眼中にないという態度に頭にきて……。庇われたその瞬間まで、私はグンジョーのことを忘れていた。

私とグンジョーはチームなのだ、まだ一月半くらいだけど、今までお互いに助け合って狩りをしてきたのである。

だけど、私はそんな事も忘れて、一人で戦った。その拳句が、私を庇って動かなくなってしまったグンジョー。

私は最低だ。ハンターとして、グンジョーの相方として、本当に……最低である。

強くなる雨脚。

叩きつけるような、激しい雨音に混じって、低くうなる音がうつむく私の耳に届いた。

ハッと顔を上げると、私は今の状況を思い出した。

薄暗い闇と滝のような雨に視界が遮られるなか、青白く発光する巨大な影がゆっくりと近づいてくる。

そして、雨をかき分けるように、ジンオウガが現れた。

「……………」

私は、グンジョーを強く抱きしめなおすと、無言でジンオウガを睨み付けた。

強さを増しつつ振り続ける雨に体力を奪われ、これが今の私にできる精一杯の抵抗なのだ。

ジンオウガは私をいちべつするように見ると、突然空に向かって遠吠えをあげる。すると、遠吠えに呼応するかのように、突然雨雲が光り雷鳴が轟いた。

そして、ジンオウガは私の方を見向きもせず、光った雨雲の方を睨みつける。

「なにが、起きているの……？」

私がそつつぶやいた時。再び雷鳴が轟くと、赤い光を放つ何かは雨雲から飛び出し、こちらへ向かってくる。降り注ぐ雨に遮られてよく分からないが、その何かは長細い形で、まるで泳ぐように空中を移動している。

そして、その何かが近づくにつれて、まるで嵐のように雨と風が荒れ狂い始めた。

「ぐっ……！」

暴風と豪雨にさらされ、突然思い出したかのように体が悲鳴をあげる。

段々と遠のく意識。

そして、ジンオウガと何かはにらみ合うと、同時に咆哮した。

二つの咆哮が重なり、溪流中に轟くような轟音が生まれた。

その咆哮を聞きながら、ついに私の意識は闇へと落ちていくのであった。

「う……うう？」

唐突に目が覚めた。

ぼんやりとぼやける視界と、ぼーっとして回らない頭。

「……ぐう！？」

身体を起こそうとした瞬間、痛みが全身に駆け巡り、私は再び倒れてしまった。

倒れたとき、ボフッと何か身体が沈みこむような感覚で、私はベッドに寝ているのだと気が付いた。

「んっ……はあ……」

今度は倒れてしまわないように、痛みをこらえてゆっくりと身体を起こす。すると、ぼやけて良く見えなかった視界が、ようやくいつもの通りの視界に戻ってきた。

私の身体には包帯が巻かれている、誰かが看護をしてくれていたようだ。

そして、私は円形の木の壁で囲まれた小さな家にいるようだ。

私が寝るベッドは端に設置されており、中心には丸い机、そしてベッドの反対の端には大きな収納箱が置かれている。

私はこの部屋に見覚えがあった。

「……ここって、私の家？」

キョロキョロと、部屋全体を見回すように眺める。

適当に配置された家具に、開けっ放しの窓。そして、大量の保存食^{おやつ}。

間違いない、私の家だ。

「ハンターさま、目が覚めたようですわね」

私が自分の家にいる事を確信したそのとき、家の戸が開き女性の中へ入ってきた。桃色の着物を着た細目の女性、言わずもがなユクモ村の村長さんである。

「村長さ… あぐっ!？」

村長さんに近づこうと身体を動かしたとたんに、再び身体中に痛みが走る。

「ああ、まだ安静にしていけないといけませんわ……」

村長さんは私に駆け寄ると、そう言って体を支えてくれる。村長さんに支えてもらいながら、私はゆっくりとベッドに身体を倒した。

「あの、私なんで……?」

私は溪流に居たはずなのに、何故村へと戻ってきているのだろうか？

そもそも、何故生きているのだろうか？

「ハンターさま達がクエストに出発された後、ギルドから雷狼竜が溪流の方へ移動したとの報告が入ったのです」

私の問いかけに答えるように、語りだす村長さん。

「さすがにジンオウガとあつてはハンターさまが危険だと思い、ち

ようどクエストから帰ってきたほかのハンターの方々に救援へ向かってもらったのです」

「他のハンターですか？」

「ええ、しばらくの間この村を中心に活動するそうですので、近いうちに顔を合わすこともあると思いますわ。そのハンターの方々の報告によると、溪流に到着時は凄いい嵐で搜索は困難、嵐が晴れてから搜索を開始して倒れている貴方を見つけたそうですの」

私は村長の話を聞きながら、あの時の光景を思い出していた。嵐の中、青く光るジンオウガと共鳴するように赤く光る何か……。ジンオウガの圧倒的な存在感とはまた違う、妙な感覚。あれはいったい何だったのだろうか？

「……私、何で生きているんでしょう？」

独り言のようにつぶやく。

あの後、ジンオウガはどうなったのだろうか？ ああの赤い光はどうなったのだろうか？

分からないことだらけである。

「運が良かった、としか言えませんが。特に貴方のオトモさんは――」

「グンジョーは……あぐっ!？」

村長の言葉を聞いた瞬間。急にグンジョーのことが頭中にあふれかえり、気づけば私は飛び起きていた。

急に身体を動かしたことで、身体中を痛みが走り回る。

「落ち着きなさい、オトモさんも一命は取り留めました……」

私の身体を押さえ、落ち着くように言う村長。

「そ、そうですか……」

ほっとした所為か身体から力が抜け、ベッドに倒れこむ。
そして、何故かポロポロと涙がこぼれた。

「ただ……」

しかし、安心する私の心に水を差すように、村長の話は続いていた。

どこか暗く真剣な村長さんに、私は何か嫌な予感がした。

「ただ……何ですか？」

恐る恐る、尋ねる。

「ただ、一命は取り留めたのですが、意識は戻らず、もしかしたらこのままずっと……」

そう言って、村長は顔を伏せる。

私は、頭が真っ白になり、呆然とするだけで、何も考えることができなかった……。

六話・森の異変（後編）（後書き）

とりあえず投稿。

ちよいとまとめ過ぎた、後で分けるかも。

七話・一つの結末

気づくと、真っ白い空間にいた。

「ここは……」

何処までも真っ白で、広くも狭くも感じる異様な空間。

僕は、昔この不思議な空間に見覚えがあった。

「久しぶり……いや、こういう場合は何て言えば良いのかのう？」

突然後ろから声を掛けられた、これまた昔に聞いた覚えのある声である。

あれは僕がアイルーとして生まれる前のことだから、えーと……何年だ？

「久しぶりで良いんじゃないですか？」

まあ、何年でも良いか、だいぶ年月が経ったというのは変わらないのだし……。

僕は、振り返りながらそう言った。

「ふーむ、君にとっては久しぶりなのだろうけど、わしにとっては一瞬のような物だから少し迷ってしまったのじゃよ」

僕が振り返ると、そこには——モサモサの髭を生やし、トーガを纏った……猫がいた。

「……あれ？」

首をかしげる。

昔のことで、おぼろげにしか覚えていないのだが、何か違和感を感じる。

「どうかしたかの？」

「いや、何か前と違うように気がして……」

「む、うゝむ……」

僕がそう言うと、モサモサ髭の猫は自分の髭をいじり、何かを考えるように小さく唸る。

「ああ、この姿か！？」

しばらくして、何かに気づいたらしく、髭の猫はポンと両手を打ち合わせた。

「そつだにや、前は猫じゃなくて人間じゃなかったですよ？」

やっと思い出した。たしか、前はよぼよぼの爺さんだったはずだ。

「円滑に説明できるよう、わたしの姿はここに来た者に合わせて自動的に変化するのじゃよ。まあ何だ、いめちえんみたいなものだと思ってくれば良いわい」

「イメチェンとは、何か違うとおもふのにや……」

こうして、再び僕はこの謎の老人……いや、謎の老猫と出会った

のだった。

そして、この老人^{ネコ}に出会ったということは、つまり……。

僕は、死んでしまったらしい。

「ここに来たってことは、やっぱりボクは死んだのですかにかにや？」

帯電状態のジンオウガの攻撃に、態々自分から飛び込んだのだ。まあ、分かりきったことが……。

「ふむ、一応はそう言うことになるのう」

髭をいじりながら、僕の問いに答える老猫。

どうでも良いことだが、問答の際、この爺さんは必ず自分の髭をさわる。癖なのだろうか？

「一応？」

僕は爺さんの、何か含むような言い方に首をかしげた。部下のミスがどうか、またそんな感じのあれなのだろうか。

「今、君の身体は、意識不明で昏睡しておる。俗に言う、植物状態というヤツじゃ」

「植物状態……」

呆然とつぶやいて、僕は自分の持つ植物状態の患者のイメージ、人工呼吸器を付けて寝たまま動かない図を想像した。

「……今から自分の身体に戻るとか、そういうのはできないのですかじゃ？」

今僕は、魂だけの存在みたいなものだろうか……。

爺さんの言い様からして、恐らくは無理なのだろう。しかし、長い間植物状態だった人が奇跡的に回復したという話もあるのだ、するような気持ちで尋ねる。

「君の場合は色々と特殊だから、一般的な人と比べてその存在が……分かりやすく言うと、その魂が安定しておる。本来なら、すぐにも元の身体に戻ってもらうのだがの……」

「ボ、ボクは何故戻れないのですにや」

理由を尋ねる。

「……時間切れじゃ」

「時間切れ……。で、でも、今すぐ戻れば間に合っんじゃないのですにや？」

今さっき、この爺さんが言ったことが正しいのなら、僕の身体はまだ生きているという事になる。

「転生したとは言え、君はあの世界ではイレギュラーなのじゃ。行くには、かなりの時間を要するのじゃよ……」

「かなりって、いったいどれくらい掛かるのですにや？」

四十年とか五十年とか、そう言う途方もない時間だろうか？
アイルールの平均的な寿命など知らないが、さすがにそれほど長くは生きられないだろう。

「一〇二年といったところかのお……」

髭をいじくり、そう答える爺さん。

「それくらいなら、全然余裕で戻れると思うのですがにゃ？」

僕は、アイルールとしてまだまだ若者なのだ、一年や二年で寿命を迎えるほど年寄りではない。それに、二十年以上の植物状態から回復した人もいるのだ、そっちの時間的にも大丈夫なのではなかろうか？

「無理なのじゃよ、よく考えてみなさい、今君が生きる世界を……」

「僕の生きる世界……」

それはもちろん、数々のモンスターが跋扈する、モンスターハンターの世界だ。僕はアイルールとして、その世界で生きてきた。

元々僕が生きていた世界とは違い、あまり科学は発展していないが、自然が豊かで美しい世界だと僕は思っている。

「……あ」

そこまで思い浮かべて、僕は一つ、あることに気が付いてしまった。

「気が付いたようじゃの……」

「延命治療……かにや？」

「そうじゃ、君の生きる世界の医療技術では、植物状態になった者を長く生かすことはできないのじゃよ……」

小さく首を振り、爺さんは、もうどうしようもないという事を僕に告げるのだった。

「……爺さん。爺さんは神様なのですよにや？」

「うむ、一応そう言う風に呼ばれたりもするのう」

「何とか……何とかありませんかにや？」

気が付けば、そんな事を口走っていた。

自分でもよくわからないが、あきらめて自分の死を受け入れようと思ったとき、ふと旦那さんの顔が脳裏に浮んだのだ。そして、いつの間にか勝手に口が動いていた。

「ふむ……君、少し変わったのぉ」

まじまじと僕を見て、髭をいじくりながら爺さんが言う。

「そりゃあ、まあ、アイルーになった訳ですしにや……」

「そう言うことではなくての、心の有り様がじゃよ」

「心の有り様……」

爺さんの言った言葉を繰り返し、僕は首をかしげた。

僕は何が変わったのだろうか……？

自分ではよくわからない。

「まあ、中々自分の変化と言う物には気づけないものじゃからのお」

そう言うと、爺さんは腕を組んでうつむき、何かを考えるように度々髭をいじりだした。

「どうかしたのにや？」

「……うむ、良かろう」

僕が問いかけると同時に、しばらく悩んでいた爺さんが突然顔をあげた。どうやら、考え事の答えがたようである。

「どうかしたのにや？」

僕は、改めて爺さんに問いかける。

「実を言うと、一つだけ君の身体が生きている間に、元に戻る方法があるのじゃ」

「え……？」

突然の事に、一瞬爺さんが何を言ったのか分からなかった。

「ほ、本当ですかにや！？」

そして、言われたことを理解すると、僕は目を見開いた。

「正し、かなり強引な方法だから、相応の代償を払う覚悟があるのなら……じゃがな」

「やるのにゃ」

即答した。

また旦那さんと一緒に生きられるのなら、僕は何を失ってもかまわなかった。

「君に払ってもらう代償は、簡単に言つと記憶じゃ」

僕の意味を確認したからか、爺さんが説明を始めた。

「記憶……？」

いったい、何の記憶だろうか？

最近の、オトモアイルーになってからの記憶だと……困る。

「要は、君がイレギュラーだから戻るのに時間がかかるのじゃ。つまり、あの世界に生きる者が知っているはずのない記憶を消すことで、少しでも認識を誤魔化そうと言つ訳じゃな」

「えーと、だから……ボクは転生する前の記憶を失うと言つことですかにゃ？」

「そうじゃのお、それと下手をすると全ての記憶を失う可能性もある。しかも記憶喪失と違い、二度とその記憶が戻ることはない」

転生前の記憶か……。

正直、もうほとんど覚えていない。ほんのわずかに残っている記憶は、爺さんと婆さん、僕の大切な家族だけである。

「そう言えば、あの約束は守ってくれましたかによ？」

爺さん婆さんのことを考えた時、ふとこの老人と交^{ネコ}わした約束を思い出した。

僕自身は何も要らないから、爺さん婆さんを幸せにしてほしい。確か、そんな内容だったと思う。

……今思えば、実に自分勝手な願いだ。

この爺さんは、何でも一つ願いを叶えると言っていたはずである。さすがに生き返るのは無理でも、最後に挨拶するくらいは出来たかもしれない。

それなのに、僕は全てをこの爺さんに丸投げしたのだ。当時の自分が何を考えていたのかは、もう覚えていない。だが、想像はできる。

僕は、家族を失ったという現実を受け入れられなかったのだ。だから、もっともらしい理由を付けて、逃げ出した。

自分が傷つきたくないから、他者任せにしたのだ。

僕は、自分のことしか考えてなかったのである。

「うむ、安心なさい、わしは約束を違えたことは一度もないぞい」

「そうかによ……ありがとによ」

こんなことしか言えない自分が、情けなかった。

「……それで、どうするのかの？ 今なら、まだやめられるが……」

爺さん婆さんを忘れるか、それともこのままあきらめるか……。

「まったく、どっちにしろ、逃げることになるじゃにゃいか……」

ほんと、情けない。

この老人ネコが言うには、僕は変わったらしい。

「同じ逃げるなら、僕は……」

「決まったようだよ」

僕が決意を決めたのを感じ取ったのか、老人が言う。

「決めたのにゃ、僕は——」

こうして、僕は老人に思いを告げた。

そして——

七話・一つの結末（後書き）

時間なさ過ぎて、かなり短いです。

とりあえず投稿。

エピローグ

「旦那、ユクモ村に到着したにや」

「ん……ありがと」　一つ伸びをすると、私は竜車の荷台から降りて、御者のアイルーに礼を言った。

「有り難う御座いましたわ」

私に続いて、桃色の毛並みのアイルーが竜車から降りる。

「よし。じゃあ、荷物をおろして、さっさとクエスト完了の報告をしに行こうか」

「はい、分かりましたわユキさん」

そうして、私達は荷物の整理に取りかかるのだった。

「それではユキさん、あとは私が片付けておきますから、貴女は見舞いに行ってきたて下さいまし」

クエスト完了の報告を済ませた私達は、家に運び終えた荷物の整理を始めたのである。荷物の大半を整理し終えたところで、桃色の毛並みのアイルーが声をかけてきた。

「うーん、じゃあお願いするねサクラ」

重い物は粗方片付いたのだが、まだまだ細かい物はたくさん残っているのだ。

「はい、任されましたわ」

そう言つて、右手で胸を叩くような仕草をするのは私の新しいオトモの『サクラ』だ。桃色のとても綺麗な毛並みをしているのと、他のアイルー達と違い、語尾に『にゃ』というのが付かないのがちよつと特徴的である。

あれからだいたい二ヶ月。

ふさぎ込み、何もする気が起きなかった私に、再び狩りへ出るきつかけをくれたのがこの子なのだ。

「じゃあ、行つてくるよ」

必要な物を持ち、サクラに一声かけてから家を出る。

「行つてらっしゃいませ」

そして、サクラの声を聞きながら、私は集会浴場へ向かい歩き出すのであった。

唐突に目が覚めた。

そして、段々と意識が鮮明になっていく。

「……………」

見知らぬ天井、そして無駄な装飾のない質素な木製の壁。家具などはほとんど置かれておらず、今僕が寝転ぶベットと小さな机と椅子が一つずつあるだけだ。

「ここは……どこだよ？」

僕は何故このようなところにいるのだろうか？
頭の中が真っ白で、よく分からない。

「ん……と、にゃ」

とりあえず身体を起こす。
痛みなどはないが、どうも体に力が入らない。

「何にゃ？ 力がはいらにゃい……」

「ひよつ、チミは二ヶ月も寝てたんだぜ。体が上手く動かせないのも、当然さ」

僕が自分の体の異変に首をかしげると、いつの間に現れたのか、瓢箪を持った背の低い爺さんがベットの横に立っていた。

「あ、あんた誰だよ！？」

驚いて、反射的に尋ねる。

「ひよ？ 俺はユクモ村のギルドマネージャーだ、チミとは何度か話したはずだが覚えてない？」

「え……うーん、どうだろうにゃ?」

そう言われると、あったことがあるような気がするが、どうも思い出すことができなかった。

「全然思い出せないのにゃ」

頭の中に靄がかかったように、ほとんど何も思い出せない。思い出せることと言えば、自分の名前位だ。

「ふん、記憶の混濁というヤツだな、まあじきに何か思い出すだろうぜ。じゃ、俺はチミが起きた事を皆に知らせてくるからよ」

ギルドマネージャーと名乗った爺さんは、そう言って部屋を出て行った。

しばらく見知らぬ部屋の中でボーっとしていると、ドツドツドツと、突然勢い良く階段を駆け上るような音が聞こえた。段々と近づいてくるようで、音が大きくなっていく。

そして、この部屋のドアの前辺りで音が止まった。

「グンジョー!!」

ドアが壊れるのではないかという大きな音と共に、勢い良くドアが開く。

そして、一人の少女が部屋に飛び込んできた。

「あ……」

この少女が呼んだグンジョーというのは僕の名前だ。でも、僕の名を呼ぶこの少女は誰だろうか？

分らない、思い出せない。

それなのに、少女と目が合った瞬間、何故か涙が溢れ出した。

「ぐんじょお」

鳴きながら僕を抱きしめる少女。

「だん、にゃさん……」

少女に抱きしめられた瞬間。意図せず、自然とそんな言葉がこぼれた。

ポロポロとこぼれる涙。

「ただいま……だんにゃさん」

「グンジョー……。うん、お帰りグンジョー！」

涙を流しながら、笑う旦那さん。つられて僕も泣きながら笑う。

こうして僕は帰ってきた。

いろいろ思い出せないこともあるけど。

僕はアイルー、旦那さんのオトモとしてこの世界で生きてゆく。

エピソード（後書き）

とりあえずまとめ終了。

結構時間を置いて、改めて自分の書いたものを読んできました。書き終えたばかりの頃は何か上手く書けてないなー、なんて思っていました。今思うと案外まとめで自分でもちよっとびっくりしました。

まあ、状況説明の下手さとか色々ダメなところはあるんですけどね。

続きの話も、一応流れだけは頭の中で出来ているので、十月十五日までには書き始めるつもりです。

あと、今までの文章を、もう少し読み応えがあるように手を加えていこうと思っています。

零話・お留守番（前書き）

久しぶりに投稿。

一応連載再開ですが、前よりは遅めの更新ペースになります。

多分、二―五日に一回位（作者のモチベーションにより変動有）。

書き直すとか、偉そうに言いましたが、全然書き直しが進まない
ので、予定変更して続き書くことにしました。御免なさい。

零話・お留守番

「ぐぬぬぬぬう〜！」

暑い季節が過ぎ、紅葉に山々が赤く染まり始めた頃。

その山々の麓にある集落、ユクモ村。そこに隣接するユクモ農場と呼ばれる場所にて、我ながら奇妙と思う声をあげて僕は唸っていた。

人の太股ほどの身長、頭の上部には三角形の耳が二つ生え、手には肉球。僕はアイルーと呼ばれる、人の隣人的ポジションの存在だ。僕の職業はオトモアイルー。ハンターと呼ばれる人の狩りの手助けをする、危険だが中々にやりがいのある仕事である。

「ハア…ハア…………ふう、もう一度だにや〜！」

僕は荒れる呼吸を整えると、足元の地面に置かれた、動物の骨に大きめの鉱石を括りつけた物に手をかけた。^{バーベル}

「ぐぬぬぬぬう〜！」

そして、再び奇妙な唸り声を発しながら、両手で掴んだバーベル（アイルー用）を持ち上げようと、全身に力を込める。
地面から離れ、少しだけ持ち上がるバーベル。

「うおおおにや〜！」

気合を乗せた掛け声と共に、胸の高さまで一気にバーベルを持ち上げる。

「よし……、今日の分は終わりだにゃ」

そう言うつと、僕は持ち上げたバーベルを慎重に下ろす。それほど重量がある訳ではないが、以前誤って足の上に落とした時、悶絶して転げまわったという嫌な思い出がある。

ゆっくりと、足を挟まないように何度も確認しながら、僕はバーベルを地面に置いた。

「ふう……、自分の体力の無さには呆れるばかりだにゃ」

全身から力を抜き、つぶやくと空を見上げる。体を動かしたからか、空を見上げた拍子に腹の虫が鳴いた。

雲一割青空九割の空に浮かぶ太陽と、自分のお腹から聞こえる音が、そろそろ昼食時だと告げている。

「さてと、今日のお昼は何を食べようかにゃ」

僕はトレーニングに使っていた道具をかたずけると、昼食のメニューを考えながら農場を後にするのであった。

僕は、オトモアイルーとしての適正が低い。

「……………」

半球形の鍋に入れた米と具材を、無言でかき混ぜながら考える。ハンターのサポートという仕事から、オトモアイルーにまず求め

られるのが足手まといにならないだけの体力、並びに咄嗟の時に動ける反射神経と運動能力である。

元タインドア派であり、調査書に引かれてオトモを目指した僕には、体力・反射神経・運動能力そのどれもがオトモとしての最低の基準しか満たしていなかった。

体力などなくとも、運動能力が低くとも、僕は今まで蓄えてきた知識と調合の腕でハンターを助ければ良い。自分の知識には自信があった僕は、そんな甘っちょろいことを考えて、すぐに勤め先が決まるだろうと高をくくっていた。

だが、いざオトモアイルーとしてギルドに登録を済ませ、ネコバアに連れられて各地を回ってみると、能力の低さからか全然勤め先が決まらなかった。

同期のアイルー達の勤め先が決まっていくなか、一人だけとり残される僕。

そんな僕を雇ってくれたのが、新米ハンターのユキ・シロガネ。僕の敬愛する旦那さんである。

「……つと、良い感じだにや」

鍋の中が丁度良い感じに火が通ったのを確認すると、火を止め、食器棚から皿を取り出し盛り付ける。

僕は出来上がった料理を食卓へ運び、椅子に腰掛け両手を合わせた。

「いただきますにや」

一人分だけの料理が置かれた机に物寂しさを感じながら、料理を口へ運ぶ。一人で食べるご飯は、どこか味気なく感じる。

「はあ、だんにゃさん、早く帰ってこにゃいかにゃ……」

手が止まり、いつもなら旦那さんが座っている方向の壁を、ボッと眺めながらつぶやく。

今、おそらく旦那さんは水没林という少し遠い場所で、採集クエストの真つ最中であろう。

本当なら僕も付いていきたかったのだが、体力的に足手まといにかなりそうになかったので、仕方なく断念したしだいである。

「はあ、普段ちゃんとトレーニングをこなしておけば、今回のクエストには同行くらいは出来たかもしれないのにや」

今さら後悔しても遅いが、調べばかりに氣を取られていた自分が少し憎い。

そんな事を考えながら、僕は止まっていた手を動かし、再び料理を口へ運び始めた。

二月ほど前、僕はクエスト中に大型モンスターの攻撃を受けて、意識不明の重体に陥った。

一月前、奇跡的に意識は取り戻せたのだが、ずっと寝たきりだったせいで筋力が低下。四足では歩けるものの、二足ではただ立っていることすらままならない状況だった。障害が残らなかったのが唯一の救いである。

当然、クエストについていく事など不可能。

ここ一月ほどかけたりハビリのかいあってか、ようやくまともに動けるようにはなってきたが、クエストに出られるようになるのは当分先のことだろう。

しばらくは、このままお留守番が続きそうである。

「次のクエストには、せめて同行ぐらいできるようにはなっておきたいのにや……」

いや、まあ何というか、やはりご飯は美味しく食べたいじゃないか。

零話・お留守番（後書き）

うーん、自分がどんな文章を書いていたか忘れてしまった。

今更ですが、この小説（？）はモンスターハンターの世界観っぽい物に、作者の妄想をブレンドした感じになっております。

公式設定などと違う部分があるかも知れませんが、ご了承ください。

一話・新たなオトモ1（前書き）

一話開始。

一話・新たなオトモ1

「あー、もう。ここジメジメし過ぎよ！」

私はベースキャンプに戻ると、己の不機嫌さを隠そうともせず、ベッドに座り込んだ。そして身に付けている装備を一つ一つ取り外すと、投げ捨てるように地面に放る。

大体同じ場所に放ったため、鉄と鉄をぶつけたような鈍い音を出して地面に転がる防具。

「はあ、水没林は初めてだから、防護性能の高い防具を借りてきたけど……もっと動きやすいのを借りればよかった」

地面に散らばる、今さっきまで身に付けていた装備、アロイシリーズ一式を眺めながら私はひとりごちた。

アロイシリーズというのは、マカライト鉱石をベースに作られた金属製の防具である。シンプルで無駄のない、実用本位の合理的なデザインで、モンスター素材から作られる防具ほどではないが高い防護性能を持っている。

ただ、モンスターとの戦闘においては非常に優れた装備なのだが、金属製ゆえに少々重く足場の悪い場所で動きづらかったり、鎧が邪魔で細かい作業がしにくかったりという短所がある。

今回、クエストで私達がやってきたのは、水没林という熱帯の湿地に広がる森林地帯だ。ほとんどの地面が水浸しでぬかるんでおり、重い装備では動きが取りづらい。

それに、クエストの内容は水没林での採取であり、この防具を身に付けたままだと採取の効率が悪く、今日はあまりはかどらなかった。

特に危険なモンスターに遭遇するような事もなかったので、装備

の短所だけが悪目立ちするようなかたちになってしまったのである。

「ユキさん、その防具は借り物なのですから、乱暴に扱ってはいけませんわ」

私が少しイライラしながら腰掛けたベッドに倒れこもうとすると、自分から見て左にある、ベースキャンプの入り口の方から叱咤するように声がかけられた。

「あ、サクラお帰り。だってさー、この防具動きにくいしけつこう蒸れるしで、何かイライラしちゃって」

私は、こっちに向かって歩いてくる桃色のアイルーに軽く手を振りながら、愚痴る。

「だってさーじゃありませんわ！ 格安で貸して頂いているのですから、手入れはしっかりしなさいな」

桃色のアイルーは私の前までやってくると、腰に両手をあてながら言う。

この何かちよっとお嬢様っぽい感じのアイルー、私の所へ来た新たなオトモで名前をサクラという。実際にどこぞのお嬢様らしく、自己紹介されたときに何かウンタラカンタラ言っていたような覚えがある（内容は覚えていないけど……）。

「むー、まあ確かに借り物をぞんざいに扱うのはダメだね」

私は少し反省して、防具の手入れを始める。

「まあ、確かにこの湿気では嫌になる気持ちもわかりますけどね」

そう言つと、私の横でサクラが身に付ける防具を外し、自らも手入れを始めた。

現在、サクラの装備はアシラネコヘルムにアシラネコメイル、そして武器にアシラネコトゲ棍棒とアシラシリーズとなっている。このアシラシリーズ、身に付けるとまるで本物のアオアシラが居るように見えるらしいが、サクラの桃色の毛並みでこれを装備すると、本当に小さいアオアシラが口をあけているように見える。

「さてと、ちゃっちゃと終わらせよう」

まずは一番大きな胸部分を手元に引き寄せ、留め金などに異変がないかをチェックしていく。

サクラの言つた通り、このアロイシリーズ一式は一時的に借りているだけである。表面に付いた傷とかなら問題ないが、体に固定するための留め金などが壊れてしまったら最悪買取もあり得るのでしつかりと確認していく。

今現在、私達は資金難であり、そんなお金を払う余裕はないのだ。

一話・新たなオトモ2

「よし、あと残っているのはシーブライト鉱石と垂皮油だね」

「彩水晶を手に入れるにはピッケルで採掘しないといけませんし、垂皮油を採取するには容器が要ります。採掘した鉱石もかなりかさばるでしょうし、二日に分けて採取するのが妥当ですね」

私達は武器と防具の手入れを終えると、明日どのように行動するかを話し合いつつ、今日採取した物の整理を始めた。

特産キノコに毒テングダケ、薬草にハチミツと同じ物同士を纏めて納品ボックスに入れていく。

「はあ、それにしても、これを捕まえられたのは本当に運が良かったですね」

ふとサクラを見ると、採取した虫を入れているカゴの中を覗きながら、何やらうつとりしている。

サクラとの付き合いは、大体一ヶ月になるが、彼女がこんなふうに愛おしそうに何かを見るのは初めてだ。

昆虫採集とかが趣味だったりするのかな？

「ああ、それか、確かゴツドカブトって言ったっけ……。確か凄く珍しいのよね、それって何かいい物なの？」

虫かごに入っている数種類の虫の中で、他の虫よりも一回り大きな甲虫に視線を注ぐ。

「もちろん良いものですわ！」

私には昆虫採集の趣味とかないから良く分からないが、きっと良い虫なのだろう。改めて見れば、ゴッドという名前に相応しく、つやのある甲殻が光りを弾く様が後光のように見えなくもない……ような気がする。

「へえ、どんな所が良いの？」

私にはサクラ以外に、もう一匹オトモアイルーがいる。名前をグンジョーと言うのだが、以前教わった彼の趣味は中々狩りに役立つのである。

私には良く分からない世界だが、何か役に立つ事があるかも知れないので聞いてみることにした。

「それはもちろん、10000Zもの値段で売れる所ですわね……！」

私の質問に、輝くように眩しい笑顔で答えるサクラ。

「……え？」

口をポカリと開けて停止する私。

いや、まあ確かに10000Zで売れるのは美味しいのだけど……。

「ユキさん、どうかなさいました？」

首をかしげて私を見上げるサクラ。

「え、いや、あの……サクラって、昆虫集めが趣味じゃないの？」

「いえ、私にはそんな趣味御座いせんが」

そう言つて、何故そんな事を聞くのかと言わんばかりに私を見つめるサクラ。

「でも、じゃあ何でその虫にユツトカフトつつとりと見とれていたの？」

「え……ああ、アレは見とれていたのではありませんわ」

サクラは少し考えるような仕草をした後、何かに合点がいったように、ポンと両手を打ち鳴らした。

「アレはただお金の詰まった袋を想像して、ついにやけてしまっただけです」

いや、うん。

どうやら、サクラの趣味は昆虫採集ではなかったようだ。

「私、貯金とか帳簿をつけるのが大好きなのです」

「ふーん、貯金かあ……」

サクラの話に相槌を打ちながら、私は先ほど手入れをした借り物の防具に視線を注ぐ。

「そういえば、こんなふうに防具を借りなきゃいけないのって、貯金とかしてなかった所為なんだよね」

「まあ、少なくとも今のうちに金欠になるなんて事はなかったはずですね」

やや呆れたような口調のサクラ。

先にも言ったと思うが、今現在、私達は資金難である。

原因は、二月ほど前のクエストで私が犯したミスだ。それにより、一匹目のオトモのゲンジョーが重体となり、約一ヶ月入院した。

入院すると、結構なお金がかかる。一応クエストは成功扱いとなっていたため、入院費用自体は何とかあったのだが、貯金などをまったくしていなかった私の財布にはもうお金がなかった。

当然、生活するにもお金が必要なわけで、当たり前のごとく私はクエストを受注した。

そして、クエストの準備中に、自分の装備が壊れている事に気が付いたのである。当然修理代金など払えない。

本来なら装備のレンタルなんて出来ないのだが、私が村付きのハンターという事もあり、特別に装備を貸してもらえることになった。期間は私が装備の修理代金を払えるまで、代金は買取価格の5パーセントだ（ただし、壊したら買い取り）。

これが、私の現状である。

そして、実は修理費もあまり貯まっていない。生活費つてのは結構かかるものなのだ、なかなか上手く修理費に回せないのである。

うん、サクラが帳簿つけるの好きつてのは丁度いいかもしれない。

私はそういうの苦手だし、ゲンジョーは結構浪費家だ。

このクエストが終わったら、一度家計をサクラに任せてみよう。

我ながら良い案である。

私は、一人うんうんと頷くのであった。

一話・新たなオトモ2（後書き）

何か、最後がグダグダですが、投稿。

一話・新たなオトモ3

「ハッ!!」

サクラが凜とした威勢の良い掛け声と共に、アシラネコ棍棒を振る。かなりの速度で振るわれた棍棒は、吸い込まれるようにしてズワボロスの頭部へ直撃した。

鈍い打撃音の後、低く唸るような悲鳴をあげて倒れるズワボロス。

「ふむ、中々……ですわね」

サクラは、自らの得物であるアシラネコ棍棒を目線の高さまで持ち上げ、小さくうなずきながら眺めた。そして、棍棒を一通り眺めた後、軽く振り回し付着する血を払ってから背中に背負った。

「どお、新しい武器は使いやすい？」

今回、この水没林に来るにあたり、サクラの装備を新調したのである。お金は掛かったが、まず優先されるのはサクラの安全だ。

「はい、ですわ。前にあの駄猫に借りたナイフも中々使いやすいかったです。私にはこういう思い切り振り回せる物の方があっていいですよ」

そう言って笑うサクラ。装備を気に入ってくれたようで、何よりだ。

「そう、良かった。じゃあ、さっさと剥ぎ取りしちゃおうか」

そう言って、私は息絶えたズワボロスに近づくと、剥ぎ取り用のナイフを取り出し突き立てた。グニグニした独特の感觸の皮を切り裂き、剥ぎ取っていく。

「ユキさん、私は垂皮油の抽出をいたしますわ」

サクラは、私のそばまでやってくると、切り分けた垂皮竜の皮を手に取り抽出作業を開始した。

サクラを雇ってから、今回のクエストが丁度五回目のクエストである。

私はオトモアイルーと言う存在^{もの}について、多少の違いはあっても大体は同じだと思っていたのだ。だが、いざクエストに連れて行ってみると、サクラとグンジョーでは全然動きが違っていて驚いた。

サクラとグンジョー、二匹の最も目に付いた違いは、やはりモンスターとの戦闘時における姿勢だろう。

やや逃げ腰なグンジョーに対して、勇敢に立ち向かうサクラ。二匹の間には結構な戦闘力の差があり、ジャギイに苦戦するグンジョーに対して、サクラは苦もなく倒してしまう。

こう言っではグンジョーに悪いが、狩場にどちらを連れて行くのか聞かれれば間違いなく私はサクラを選ぶだろう。

ただし、全ての面でサクラの方が優秀かと問われると、そうではなかったりする。グンジョーが戦闘が苦手なように、サクラにも苦手分野がある。

それはサクラを雇って最初のクエストに行ったときの事なのだが、私はグンジョーのときと同じように料理や消費した回復薬の調合を

彼女に頼んだのである。

やや渋い顔をしながらも、了承して作業を始めるサクラ。私はそんなサクラを尻目に、装備の手入れを始めた。

異変を感じたのは、武器を研ぎ終わったときだった。何やら、鼻につく妙な匂いが辺りに漂っているのである。

原因は調査の失敗で発生したと思われる謎の物体と、見事に丸こげになった骨付き肉だった。

以来、クエスト中の料理は私が担当している。

と、言うようにサクラは戦闘外の事が苦手なのだ。本人が言う所によると、細かい作業は苦手なのだそうだ。

戦闘が苦手なグンジョーに、戦闘以外が苦手なサクラ、見事に真逆である。

グンジョーがリハビリ中なので、まだ両方を同時に連れてきた事はないが、結構相性は良さそうだ。

「ユキさん、納品分の垂皮油は抽出し終えましたわ」

「うん、こっちの剥ぎ取りも終わったよ」

流石にズワボロス一頭分の素材全てを持っていくことなど不可能なので、ポーチに入るだけを剥ぎ取り残りはここに置いておく。

「うーん、お金になりそうな部分がまだまだありますのに、少し残念ですわね」

残念そうにズワボロスの亡骸を見つめるサクラ。

「こんな足場だしね、荷物抱えたままだと、いざって時に危険だか

「らしやうがないよ」

脛辺りまで水に浸かった自分の足を見た後、私は両手を広げて首を振った。

「……ですわね」

こうして、私とサクラはズワボロスの亡骸を置いてキャンプへ戻るであつた。

残る納品物はシーブライト鉱石だけである。

サクラとの行動に慣れてきたせいか、結構良いペースだ。この分なら、予定より早くユクモ村へ帰れるだろう。

久しぶりのグンジョーのご飯、今から楽しみである。

一話・新たなオトモ3（後書き）

とりあえず投稿。

今現在の状況説明的な一話でした。

二話・ユキとサクラとゲンジョー1

「うんにやにやにやにゃん」

何となく頭に浮かんだメロディを口ずさみながら、村の通りを歩く。目指すは村の入り口、大鳥居である。

「ネコちゃん何かご機嫌だね、どうかしたの？」

「んにゃ？」

雑貨屋の前を通り過ぎようとした時、唐突に声を掛けられて立ち止まる。

「おー、雑貨屋の娘さんだにゃ。」

声のする方へ振り返ると、雑貨屋のカウンター越しに一人の女性が僕をのぞき込んでいた。この人は旦那さんの友人で、雑貨屋を営む娘さんである。

「何か良いことでもあった？」

「うん、あったにゃ」

娘さんの質問に頷き答える。

娘さんの言うとおり、僕は今とても機嫌が良いのである。

「今朝村長さんから聞いたのにゃけど、そろそろだんにゃさんが帰ってくるらしいのにゃ」

旦那さんがクエストに出発してから、今日で十二日。クエスト内容は採取だが、溪流よりもやや遠くにある水没林が狩場なため、移動時間込みで長めクエスト期限が設けられている。

「あー、それでそんなに機嫌が良いんだ。……あれ？ でもユキちゃんか帰ってくるのって三日後じゃなかった？」

雑貨屋の壁に掛かるカレンダーを一目見て、首をかしげる娘さん。

「にゃんか予定より早く採取できたらしいのにや」

村長さんから聞いた話では、昨日来た行商のアイルーがユクモ村から水没林への道中にある休憩所で旦那さんに会ったらしい。その際に旦那さんは今日の昼頃ユクモ村に到着するように帰ると言っていたそうだ。

「ふーん、そつかあ……。あ、そういえば話は変わるけど……」

僕の言葉に相槌を打ち、それから急に何か思い出したように話を切り出す娘さん。そして彼女は陳列棚の下の方、僕から見えない場所から何かを取り出した。

「ん、何にや……本？」

娘さんが取り出したのは、分厚い革張りの本だった。擦り切れてタイトルが読めないのも何の本かは分からないが、大分年期の入った本のものである。

「それ、この前お店を掃除したら出てきたんだけど、私のおばあち

やんが良く読んだ本なんだ。調合書らしいんだけど、私には必要ないから、欲しいならあげようと思って。ほら、ネコちゃん農場でよく調合とかしてるじゃない？」

「ちょ、調合書！？ 欲しいにや、くれにや！」

両手を差し出して、アピールするように跳ねる。

「うん、じゃああげる。いやー、結構大きな本で邪魔だったんだよね、おばあちゃんの形見だし捨てるなんて出来ないし、助かったわ」

大切にしておくと、娘さんは僕に本を手渡した。

「ありがとにや、大切にするのにや」

うむ、とりあえず村の入り口で旦那さんを待ちながら読むことにしよう。

僕は雑貨屋の娘さんにお礼を言うと、当初の目的地へと向かうのであった。

二話・ユキとサクラとゲンジョー1（後書き）

仕事の同僚が無断欠勤して休みが消えました……言い訳です。

ゴメンなさい、遅いうえに短いです。

とりあえず投稿。

二話・ユキとサクラとゲンジョー2

「ふむふむ、なるほどにゃあ……」

ユクモ村は山間に湧き出た温泉を中心に発展した、山奥の村である。モンスターの進入を防ぐため村は少々高い位置に有り、入り口は上から全体を見渡せる長い階段になっている。

階段を下り、ようやく下までたどりついた僕は、階段の一番下の段に腰かけ、娘さんに貰った本を読み進めていた。

「向こうでは、モンスターの麻痺牙で作るのか……雷光虫より入手はしやすいそうにゃ」

娘さんの言った通り、この本は調査書であつた。基本の物からかなり難度の高い物まで、様々な調査が書かれた本。

恐らくだが、旦那さんのハンターランクではこのレベルの本はまだ買えないだろう。

「うーむ、貰っちゃって本当に大丈夫なのかにゃ？」

調査書は、基本的にハンターギルドが管理している。それは、調査のミスによる惨事や、悪用を防ぐためでもある。

旦那さんを迎えた後で、一度ギルドへ聞きに行ったほうが良いかもしれない。

「しかもこの本……」

僕は呼んでいた頁に紐をはさみ本を閉じる、そしてかすれてタイトルが読めなくなった表紙を見る。

「違う地方の調査書にゃんだよにゃ……」

僕は再び本を開く。

例えば、今さっき僕が読んでいた頁には設置罠の一つであるシビレ罠の作り方が載っているのだが、材料にゲネポスの麻痺牙とある。ゲネポスとは、こことは違う大陸のシュレイド地方という地域の沼地や砂漠に生息する鳥竜種のモンスターである。牙に神経性の麻痺毒を持ち、集団で得物を狩る。

ここらで言う、バギイやフロギイのような存在であろうか。

当然、このユクモ村付近の狩場にゲネポスは存在しないので、このシビレ罠のレシピは使えない。ここら辺のシビレ罠の材料は雷光虫である。

僕が今まで読んだ感じだと、大体三分の一くらいが材料違いで使えないレシピなのである。しかし、使用できないと言っても無駄という訳ではなく、そこから考えられる事が多い。

例えば……。

「……んにゃ？」

自分の考えを頭の中で纏めようとした時、不意に何か動物が走る音と、それに合わせるように何かが転がる音を僕の耳が捉えた。

顔を上げて音のする方角に目を向けと、二匹のガーグアに引かれた中型の竜車がこちらへ向かって来るのを確認できた。

「帰ってきたのにゃ！」

僕は本を閉じて自分の真横に置くと、轢かれないように少しだけ路上に出た。

「だんにゃーさん、お帰りなさいだにゃー!!」

そして、僕は大声を出しながら、思い切り両手を振るのであった。

二話・ユキとサクラとゲンジヨ―2（後書き）

すいません、また短いです。

二話・ユキとサクラとゲンジョー3

「ふー、ようやく到着ですわね」

「うーん、やっぱり溪流と違って遠いから疲れるね、何か肩こつちやったよ」

サクラの言葉に返事をするように言い、体をほぐすために伸びをする。

水没林での採取を終え、中継地点まで約半日。そこからガタゴトと竜車に揺られること約半日、ようやくユクモ村の目印である大鳥居が見えてきた。

そして、村の入り口にある階段に近づいてきた時。

「だんにゃさーん、お帰りなさいだにゃー!」

久しぶり聞く、聞き覚えのある声が聞こえてきた。
ガーグア越しに見ると、村の入り口でゲンジョーが元気良く両手を振っているのが見えた。

「ただいまー、ゲンジョー!」

竜車から身乗り出し、私も手を振る。
今日は久しぶりにゲンジョーの作ったご飯が食べられる、そう思うと無性にテンションがあがるのである。

「ユキさん、危ないですわ。ちゃんと座って下さいませ!」

クイクイとサクラが私を引っ張る。

「あ、ごめん。久しぶりだから嬉しくて」

私一人でどうこうなるものでもないが、万が一電車がバランスを崩したら大事である。別にご飯は逃げないのだ、ここはおとなしくしておく事にする。

私はサクラに謝ると、電車内の椅子に腰かけた。

そうこうしている内に、ガーグアの引く電車は段々と速度を落とし、ユクモ村の入り口で完全に停止した。

「旦那等、着きましたにや」

電車を操縦していた御者のアイルーが到着を告げる。このアイルー、何でも背中で語れる渋いアイルーを目標しているらしく、道中もほとんど無口であった。おしゃべりな彼等アイルーの中では珍しい変わり者である。

「ありがとね」

御者のアイルーにお礼を言っ、電車から降りる。

「だんにゃさん、お帰りだにゃ」

電車から降りると、グンジョーが右手を上げて私を迎えてくれた。

「うん、ただいま」

私はそう言いながらしゃがむと、グンジョーの右手を自分の右手

で軽く叩いた。こういうのも、一応ハイタッチと言っただろうか？

「ありがとうございますわ」

私に続いてサクラが竜車から降りて、御者のアイルーに向かってお辞儀をした。

「だんにゃさん、今回のクエストはどうだったにゃ？」

そんなサクラをよそに、私に話しかけるグンジョー。

「うーん、そーねえ……」

「二人とも、喋ってないでさっさと荷物を下ろしますわよ」

クエスト中の出来事をグンジョーに聞かせようとすると、後ろからサクラに注意され私は話を中断した。

「ごめん、話は荷物を運び終えてからにしょ」

私はグンジョーに一言謝ると、竜車の荷台へ向かい荷物を下ろし始めるのだった。

二話・ユキとサクラとダンジョー3（後書き）

今回も短いです。

二話・ユキとサクラとゲンジョー4

「や！ はア！ てえい！」

正午を過ぎ、太陽が傾きだした頃。

ユクモ農場に、気合の入った掛け声が響いていた。掛け声の主は桃色の毛並みを持つアイルー、サクラである。

サクラは彼女の得物であるアシラネコ棍棒を、練習用の木剣を振るかのように軽々と自在に振り回していた。

「馬鹿力め……」

そんなサクラを横目に見て一言つぶやくと、僕はすり鉢に放り込んだ薬草を力任せにすり潰した。

「ゲンジョー、何か言いました？」

「別に、何も言っていないにや」

危ない危ない、聞こえないように小さく言っただつたのだ。だが、どうやら少し聞こえてしまったらしい。

あれから、荷物の片付けを終え旦那さん他一名と共に昼食を取った後、旦那さんは村長さんの所へ報告と今後の話し合いへ行ってしまった。

そして、特にやる事もない僕は、調合して暇を潰そうとユクモ農場へやって来たのである。

……来たのであるが――

「暗い、暗いですわ！　グンジョー、貴方もう少し明るく振舞えませんか？」

素振りをやめて、僕に話しかけてくるサクラ。

このピンク色がついてきたのは大きな誤算であつた。

「貴方がじめじめと暗い所為で、訓練に集中できませんわ」

だったら離れた場所でやれば良いのに、いちいち鬱陶しいピンク色である。

「……………」

僕は新しい薬草をすり鉢に放り込むと、無言で再び力任せにすり潰した。

正直、僕はこのピンク色が嫌いである。……いや、嫌いというよりは、好きじゃないと言った方が適切だろうか？

アイルーの中でもかなりの運動能力に、新米オトモとは思えない戦闘センス。

旦那さんに助けられてばかりの、足手纏いな僕とは違う。オトモアイルーに成るべくして成ったような、いわゆる天才。

まあ、あれだ……要は、ただの嫉妬である。

そしてなにより――

「ちょっと、聞いてますの！？」

僕が何も答えないのが、少し声を荒げるピンク色。

「うるさいにゃあ、気が散って調合に集中できにゃいから、ピンク色は静かに……あつ——」

僕が自分の失敗に気が付いたとき、すでにそれは振り上げられていた。

アシラネコ棍棒、上手くモンスターの頭部に叩きつけければ昏倒させることも出来る、中々の重量を持つ鈍器。

サクラの振り下ろしたそれは、僕の鼻先をかすめて、轟音と共に地面に叩きつけられた。

「にゃひい!!」

悲鳴をあげて、僕は後ろに転がった。

「……ピンクと、そう呼ぶなと言いましたわよねえ？」

顔をあげると、棍棒を地面に突き立てるように持ち、鬼のような気迫を放ちながら、僕を睨むサクラがいた。

「うにゃひい!?!」

恐怖のあまり、僕は妙な悲鳴をあげる。

何かコンプレックスが有るようで、サクラはピンクと呼ばれると怒る。前にそう呼んで、一発ぶん殴られてから言わないようにしていたのだが、つい口が滑ってしまった。

僕的には、サクラの毛並みはとても綺麗だと思うのだが、彼女は嫌なようである。

「次はありませんわ……」

ジロリと僕を睨みつけて、サクラは農場から去っていった。

「……ふう」

サクラが完全に見えなくなっただけから、肺に溜まった空気を吐き出した。

誰にでも、言われて嫌な事はある。今サクラが怒ったのは、完全に僕の落ち度である。

「いや、まあ……僕が悪いのだけれどもにゃあ……」

つぶやきながら、先ほど棍棒がかすれてヒリヒリと痛み出した鼻をさする。

「こう、なんと言っか……すぐに手が出るのは、何とかならにゃいかにゃあ」

一人だけになったユクモ農場で、誰に言っでもなく僕はつぶやくのだった。

二話・ユキとサクラとゲンジヨ―4（後書き）

とりあえず投稿。

お知らせ

初めに、ボクはアイルーの更新でなくて、大変申し訳ありません。作品についての事なので、急遽お知らせという形で書かせていただきました。

現在、私にとって非常に困った事態が発生してしまいまして、このままでは続きを更新出来ない状況におちいつてしまいました。こんな所で書くことではありませんが、私の心情的に非常に参っております。

詳しい事情は活動報告に書いてありますので、ご意見いただけるとありがたいです。

更新を再開する時は、このお知らせは消そうと思っています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5827t/>

ボクはアイルー

2011年11月16日12時18分発行